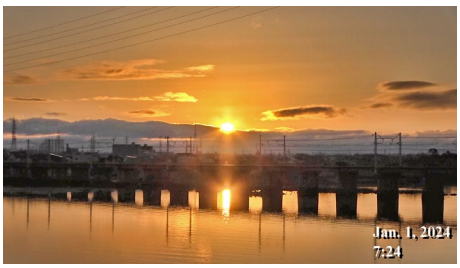
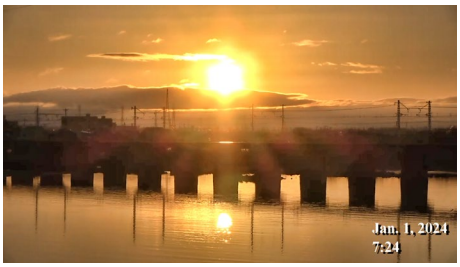
Jan. 1, 2024　初日の出

2024 年、初日の出は昨年と同じ加古川河川敷を見下ろす土手上から。
　県道 79 号まで寒風を切ってサイクリング。加古川土手上まで自転車を押し上げると、土手から河川敷にかけて初日の出を目的とした人々がすでに大勢集まっている。雲の隙間の明るさから太陽が昇ってくる方角を見定め、山陽電車の鉄橋を前景とする場所に三脚をセットして太陽が昇っ





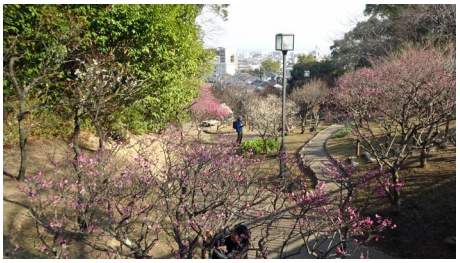
てくるまで待つ。今年も低い部分には厚い雲がかかり、太陽はその雲の先端部を黄金色に染めながら昇ってくる。川面に伸びる光の道は今年も短く、山陽電車が鉄橋を渡っていく際に、窓内が赤く染まりながら走り抜けていく光景が絵になる。今年は加古川河川敷や土手上で初日の出を迎える多くの人たちの映像記録はとらないまま撤収。

Jan. 2-4, 2024　ムラサキシジミの越冬個体を確認

　昨年暮れからウバメガシの 1 か所で観察をしているムラサキシジミの越冬個体を 1/2 の初テニスの合間に確認して OLYMPUS TG-6 で撮影記録し、帰宅して PC に取り込んだ時点で、撮影時には 1 個体だとしか見えなかったのにしっかり 2 個体が記録できている。TG-6 での撮影が露出オーバー気味となっているため、1/4 にビデオカメラで再撮影。開翅が望めなくて雌雄の判別はできないが、昨年の観察から両者ともに♂だと思われる。

Jan. 9, 2024　須磨離宮公園

　シルバーパス利用で須磨離宮公園の梅林観賞。ロウバイも 2 種があって、微妙な違いがみられる。動画では噴水に虹が出る角度を探してみる。



Mar. 3-4, 2024　高知に帰省

　妻の窪川中学校同窓会に便乗して、1 泊 2 日で五台山牧野植物園を訪れる。初日の 3 日に翌日の五台山に向かうバス便を調べるためにはりまや橋へと歩くと、始発は JR 高知駅前だとわかり足

裏のしびれ感を我慢しながら駅へと向かう。途上、風に吹き飛ばされて路面に倒れこむムラサキツバメがいて、そっと指でつまんで高知駅前広場の花畑にある名の花に止まらせて写真記録を取るつもりが、花に止まらずに飛ばれてしまう。結局路面に止まって開翅してくれる様子を記録できただけ。きれいな♀だが、市街地の食樹がないところに飛んできた理由が不明。高知駅前には坂本龍馬、中岡慎太郎、武市半平太の銅像が立ち、高架となった駅には幼いころの孫が対好きだったアンパンマンのラッピングが目立つ出発前の列車がいて、ついカメラを向けてしまう。特急の南風号だったよう。宿泊は駅前のタワーホテルで筆者一人。妻は同窓会後西城館で仲間と。

　朝 8 時発のバスで五台山へ。山頂で下車してみたが展望所だった食堂のあった建物が壊されて、小さな仮展望台があるだけの寂しい山頂部となり、TV 塔も NHK だけとなっている。クロガネモチの命名由来の説明板で初めて樹に親しみを覚える。南国土佐を後にして、の歌碑で記念の

自撮り撮影をしてから、懐かしい石段の道を下って竹林寺へと歩き、祖父が寄進した石灯篭のある日吉神社でオガタマノキのまわりでミカドアゲハの蛹を探してみたが見つけられず。中学生時代に故岡本先生がミカドアゲハの越冬蛹を発見された仁王門をくぐるとお遍路さんが丁寧にお礼をする姿が印象にのこる。9 時からという牧野植物園には幼稚園児のバスが到着し、マイカーで来る観光者も徐々に増えてくる。足元に咲く目立たないヒメイカリソウの白い花にカメラを向ける女性がいてうれしくなりつい声をかけてみる。彼女

はユキワリイチゲやバイカオウレンという地味な植物の撮影場所でも出会うことになる。バイカ

オウレンの花は一輪だけで、幼稚園児がクイズ形式の観察ノートをもって走り回っており、引率の先生にそっと花の位置を教えてあげる。五台山には多く自生しているビロードムラサキが白い実をつけていて、これも観察ノートにある子供たちが見つけなければいけない対象の植物になっている。

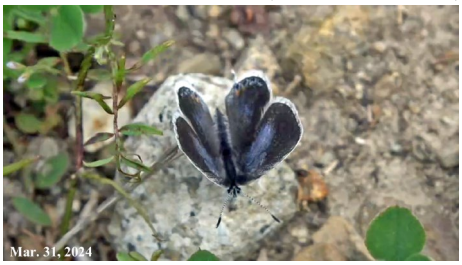
妻が同窓の仲良しとお茶タイムを済ませたころに電話連絡をして竹林寺前で落合い、ふもとの五台山実家に立ち寄る。庭でキンカンを収穫して兄が気付いてくれ、ミツワさんも玄関のドアに体を預けながらしばし談笑タイム。そのあとは公設市場でブンタンなどを買い込んで約 4 時間の帰路に就く。

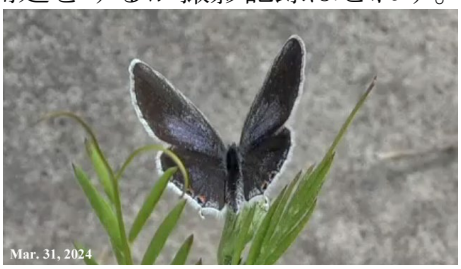
Mar. 30, 2024　テニスの合間に蝶観察

菜の花にモンシロチョウ。飛来したアカタテハは路面で日向ぼっこ。ウバメガシの垣根周りを調べたが、越冬したはずのムラサキシジミの姿がなく寂しい。

Mar. 31, 2024　ジャコウアゲハ生息地で春の蝶

テニスの後で蝶観察：高砂公園で越冬明けウラギンシジミ♂の開翅をみるが撮影記録はとれず。

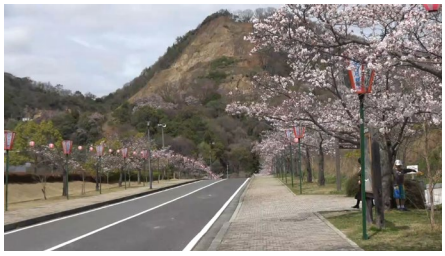


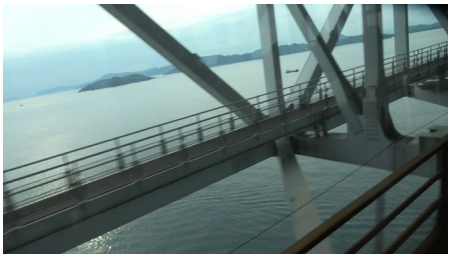
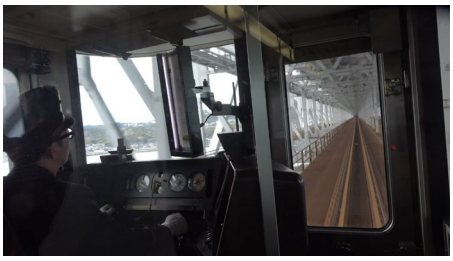


ジャコウアゲハ生息地に移動してツバメシジミの低温期型美麗♀とウマノスズクサの芽生えを確認。現地に戻した複数の越冬蛹の羽化はまだ。

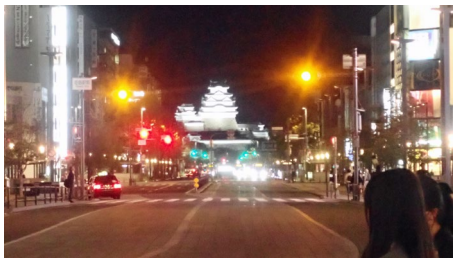
Apr. 4, 2024 備前市みやま公園に遠征

JR 青春キップ利用で岡山経由備前田井駅。あとは地元のおじさんに道を聞いて徒歩 20 分という距離を歩く。交差点で右折すべきところを直進して 800m ほどをロス。途中のレストラン：バイキングで新鮮な海鮮丼と刺身定食を賞味。妻が一度来てみたかったところだというだけあっていずれも美味で値段も手ごろ。みやま公園につく頃には両足裏のしびれがつらいが、2000 本という桜があるようには見えない公園は家族連れにはじゅうぶん楽しめる感じ。妻がルリタテハを見



つけるが、キラリと翅表のルリ色を輝かせて姿を消す。他にはタンポポ周りにキタキチョウとモンキチョウ。新鮮な魚類などを売る店でいくらかの買い物を楽しみ、バスで駅まで戻ることも考えたがちょうどの便がなく長い坂道を下る徒歩で戻り、せっかくだからと瀬戸大橋を渡ってみる。高松駅からはそのままのトンボ返りで、たまたま先頭車に乗れたことで外人観光客と一緒にビデオ撮影を楽しむ。岡山からの帰路、三石駅で発生した人身事故で 3 時間以上の遅延となり、岡山に戻って播州赤穂線で相生に向かうつもりが、結局、山陽本線が復旧したため、そのままはじめと同じ経路で姫路へともどる。



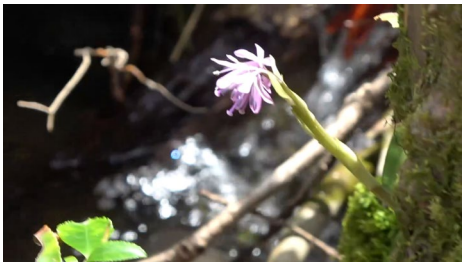
Apr. 5, 2024　ジャコウアゲハ生息地でツバメシジミ♂

ジャコウアゲハの羽化はまだで、生息地ではカラスノエンドウ、タンポポまわりをツバメシジミ、ベニシジミ、モンキチョウが飛び遊ぶ。越冬明けのキタテハも姿を見せたが、本年初見とな

るノラノンジンに近づいたキアゲハと桜の花をかすめ飛ぶアゲハチョウともども撮影記録はとれず。

Apr. 6, 2024　ギフチョウ観察会、そのあと稲美町

「加古川の里山・ギフチョウ・ネット」の初回行事：ギフチョウ観察会は標高 271m まで登った第 1 観察地では蝶の姿がなく、第 2 観察地でようやく複数のギフチョウをみる。撮影できた個



体は右後翅が大破した♀で、産卵行動は見られない。雑木林内で遊ぶ他の蝶は越冬明けのルリタテハ、路面でミネラル成分を求めるルリシジミ、撮影記録が取れなかったミヤマセセリなど。ギフチョウの吸蜜を期待するイカリソウとスミレ類は複数株咲いており、心地よい流水の近くに一輪だけのショウジョウバカマをみる。

観察会の後、稲美町の曇川まで桜並木を見に行ってみたが、ちょうど花見を楽しむ地元の人がいるので妻が聞いてみても、前に行った花筏をみた場所がわからないまま、まずまずの映り込み風景をみて退散。

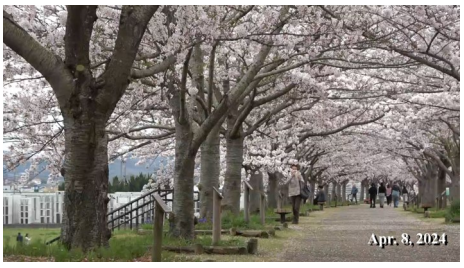
Apr. 7, 2024　荒井町小松原

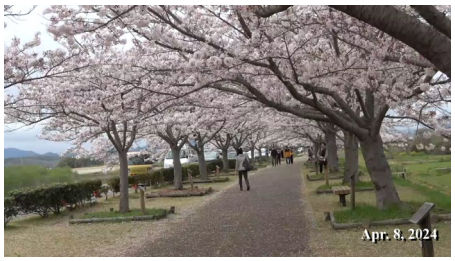
いぜんとしてジャコウアゲハの発生がなく、観察できるのは草地で飛び遊ぶベニシジミ、ツバ

メシジミと撮影が容易ではないモンキチョウ。

Apr. 8, 2024　小野の桜堤と稲美町曇川

朝から風が強くは吹かないことで、桜並木の映り込み期待で小野まで行ってみたが、昨年あった駐車場がなくてやむなく路上駐車。ここは場所的に風が通り抜けてしまうため、観賞用に水を張って準備された田んぼにはわずかにさざ波があって、かろうじて映り込みをみられる撮影角度を探して歩いてみる。次いで、近くの北山天満神社をナビ設定して曇川４月６日のリベンジ。以





前のような花筏は見られないが、川が幅狭いおかげで風の影響が少なく、何か所かの映り込みは小野堤に比べて鮮明。

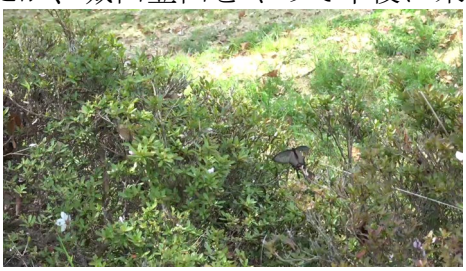
Apr. 11, 2024　ジャコウアゲハはまだ

本日も観察蝶はいつものツバメシジミとベニシジミに、越冬個体なのか今年の発生なのかわか

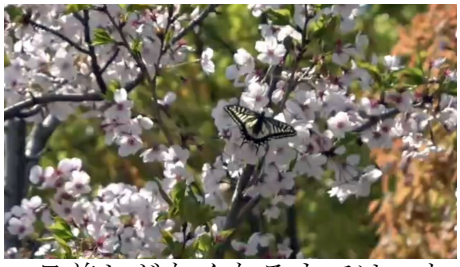
らないがヒメアカタテハの新鮮個体を初見。ツバメシジミの♀は低温期型で美しい。ウマノスズクも芽をのばしており、桜も咲いてジャコウアゲハがいつ発生してもいい感じ。

Apr. 13, 2024　ジャコウアゲハが発生し、ギフチョウのイカリソウ吸蜜も

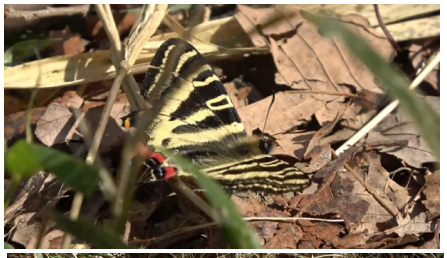
　ギフチョウ観察会第 2 回の日だが、城山登山をやめて午後に來住に行くことにして、午前中は



小松原ぼたん公園へ。そこで今年初見のジャコウアゲハの発生を確認。モンキチョウの黄色型♀の産卵と桜で吸蜜するアゲハチョウも観察。



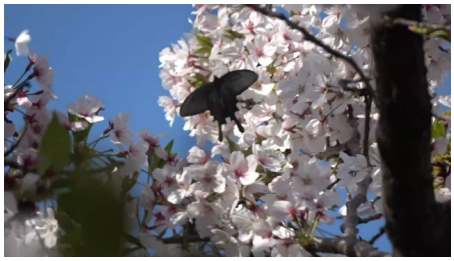
　午後の來住到着は 15 時前で、京都からの北岡氏、神戸からの新井氏がイカリソウの咲く場所に 2 人して陣取っていた。話を聞けばイカリソウでの吸蜜場面の撮影に成功していて、新井氏のきれいな撮影記録も見せてもらう。やがて二人が帰っていき、日差しがなくなるまでは、と



一人きりになって粘る。ギフチョウは何度か飛来するが、路面や葉上などで日向ぼっこを始めるのを撮影するばかりでなかなか花にはやってこない。それでもコバノミツバツツジの蜜を求める個体が見られるようになり、やがて飛来を予想して撮影目標としていたイカリソウとは違う場所のイカリソウにギフチョウが立ち寄って吸蜜し始める。ビデオカメラのファインダーにその姿をうまくとらえきれなくて焦るが、ズームアップをあきらめて確実に映っているはずの撮影に切り替える。あとで確認すると、その変更のおかげで画面中央ではないが、確実にイカリドウの花蜜を求めるギフチョウの姿を記録できていて一安心。

Apr. 14, 2024　ジャコウアゲハが桜で吸蜜

　ぼたん公園でジャコウアゲハの動きを追う。草むらのカンサイタンポポで頻度高く蜜を吸ってはユキヤナギの茂みで休息する、という動きを繰り返していたジャコウアゲハがやがて桜の花でも吸蜜してくれる。その位置が高いためズームアップでのビデオ撮影には手振れの影響が出てし



まって残念。

Apr. 16-17, 2024　大粒のヒョウが降る

20 時過ぎから雷鳴がとどろき、激しい雨のなか 2 階の部屋にいながらバチバチという雨が打ち当たるあまり聞いたことのない音が響く。すぐには何のせいなのか確かめることなく PC 作業を続けていたが、娘が階段を駆け上がってきて車は大丈夫だろうかと窓を開けて車の屋根をのぞき

込む。すさまじい音の正体がヒョウだとわかり、外を見ると大粒の白い塊が路面に増えている。バルコニーに落ちたヒョウの塊はまさしく大きな氷の塊で物差しをあてると 3cm を超える塊もある。よく朝になって初めて車のボンネットに複数のえくぼができていることがわかり、バルコニーではエノキ植栽のプランターが破壊され、エノキの新葉もちぎれて吹き飛んでいる。キハダはせっかく伸び始めたが一枝ごと折れて吹き飛び、ジョウロの注ぎ口が完璧に破壊されている。

Apr. 17, 2024　ジャコウアゲハと桜

春雷と同時に大粒の雹が降り注いだせいで花が激減した桜で、複数のジャコウアゲハが残り少ない花蜜を惜しむように吸蜜。14 日のビデオ撮影で手振れがひどかったことを反省し、ビデオ設

定を見直して手振れ補正の最高機能へと変更したおかげで本日の撮影は満足のいく記録となっている。なお、この日はぼたん公園内の孤立した小さなウマノスズクサに母蝶が産卵する場面も観察でき、近距離から 1 個ずつ卵を葉裏へと押し付けるように産み付けていく一部始終の動画記録が取れた。

Apr. 18, 2024　シルビアシジミ初見 Ser. 1

今年初めて日笠山を訪問。観光用のぼたん桜の開花はまだだが、だれでも出入りできるように門扉が開放されている。ミヤコグサの黄色い花も数か所に確認できるが、シルビアシジミが飛び交う気配はない。これまでの観察記憶をたどってぐるりと歩いて回ってみてもキタキチョウとヒメウラナミジャノメの飛翔をみるだけ。シジミチョウが飛んだ、と駆け付けるとツバメシジミ。きれいなベニシジミも飛び出すので撮影記録を取り、マツバウンランが多く咲く斜面近くでしばらく待つ。その間にも周りの少しの変化にも気を配り、足元のカンサイタンポポをのぞくとシルビアシジミが休息中。今年の初見個体は新鮮度が低い♀で接近撮影中に飛ばれるが、近くのカンサ

イタンポポやカタバミの花にとまるなど遠くへとは飛ばないのが幸い。その動きについていくとうれしいことにマツバウンランの花にとまって吸蜜し始める。背景とのコントラストが不明瞭でしっかりフォーカスが合っているのかどうかわからないため、より近くで撮影しようと斜面草地をにじり寄ると、気配を感じたシルビアには飛ばれてしまう。撮影記録にはフォーカスがあった部分がほとんどないのが悔しいが、確かに口吻を伸ばしていると確認できる記録を切り取ることはできることから「きべりはむし」への短報投稿を考える。

その他の珍しい例として、風をよけるように休息しているキアゲハにアゲハチョウが近づいてそのまま近くで同じように休息し始める光景を観察記録。

Apr. 19, 2024　高砂阿弥陀地区のシルビアシジミ　Ser. 2

曽根地区ではシルビアシジミの♂を観察できないため、第二生息地の阿弥陀地区はどうかと調

査。確実に確認できたのは4♂2♀で♂はもっと多く飛んでいたかもしれない。カラスノエンドウの花に止まる個体もみたが吸蜜したのかどうかはわからず撮影も間に合わなくて残念。

加古川の生息地でもそうだが、ヤマトシジミが混生していることで判別が紛らわしく、美しいベニシジミとともに撮影記録はとっておく。

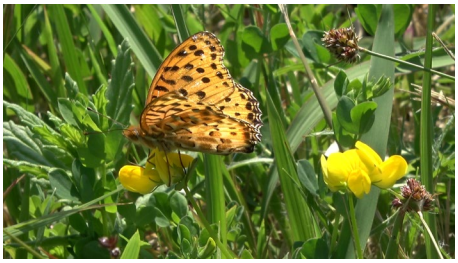
Apr. 20, 2024　高砂阿弥陀地区のシルビアシジミ　Ser. 3

　カラスノエンドウの花蜜を求める場面の観察記録をとる目的でテニスの後に再訪問したが、観察できるシルビアシジの♂は路面で開翅する個体ばかりで♀はミヤコグサで吸蜜。混生するヤマト

シジミはシルビアシジミのように長く飛ぶことなく、すぐにカタバミなどの花で蜜を吸う。結局、この日はカラスノエンドウに近づく個体すら目にすることはなし。

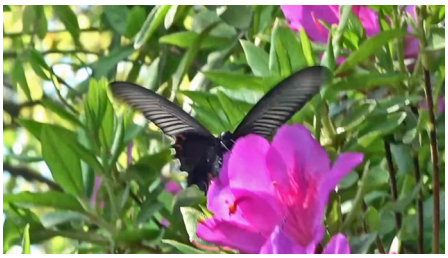
Apr. 25, 2024　高砂市のシルビアシジミ　Ser. 4

　第一生息地で♂の発生を確認できたが、ミヤコグサで吸蜜する個体が翅表を見せてくれることは



なし。他にみたのはツマグロヒョウモン、ヒメウラナミジャノメ、ヒラドツツジで吸蜜するクロアゲハとキアゲハ。

　次いで第二生息地でカラスノエンドウかマツバウンランで吸蜜する個体に期待するが、飛び回っては路面か草葉上で開翅するばかりで、期待する花での吸蜜場面はみられず。同じく♀にもついて回ってみたが、ミヤコグサにとまっても産卵することはなし。



Apr. 27, 2024　ギフチョウ産卵調査とシルビアシジミ観察　シルビア Ser. 5

8 名の参加者で 8 か所を調査。2 か所はまったく産卵なく、残る 6 か所で確認したのは 235 卵。昨年は 1953 卵でこの激減が今年の天候不順のせいなのかどうかは不明。なお、写真記録に示すようにすでに孵化した幼虫も観察。途中、シルビアシジミの生息地に立ち寄って発生状況を調

査。ここは混生するヤマトシジミの個体数が多く、入り乱れて飛び交う♂のなかにシルビアだけを見つけるのは容易ではなく、翅表がずいぶん青いからと追い回して、ようやく止まった段階で新鮮ナヤマトシジミだったりする。ここでの成果は低温期型のきれいな♀の V 字開翅と、産卵場面を記録できたこと。

他の観察種は金色に輝く鱗粉がきれいなコチャバネセセリとツバメシジミ、ヒゲナガガの一

種、および名前の分からないゾウムシの一種。ヒゲナガガは止まらない限り撮影が難しく、飛び回る個体を追い続けてみたが、結局、端から静止していた個体の撮影記録だけで、より接近した拡大撮影はできないまま。

May 2, 2024　赤西渓谷に遠征

ミツバウツギとナツグミの花の咲き具合に関して何も情報がないまま赤西渓谷へ。小野市のひまわり公園ではりんごの花がほとんど咲き終わっていたが、気温が低い山岳部だとまだ残っている可能性があると、ウスバシロチョウの訪花シーンにも期待。宍粟市へと入って車を進める道中、黒系アゲハの飛翔が何度も目に入る光景は久しぶりで、現地でのミヤマカラスアゲハなどの発生に期待が高まる。

さて現地に着くと大阪からよく来るネットマンの姿はなく、ギフチョウ・ネットの同僚も来ていない。1 台だけあらたに来た車から降りた男性は渓流に降りて渓流釣りを始める。橋のたもとのナツグミは咲き始めでいい香りが漂うほどではなく、蝶が来ている気配はない。到着した 13 時過ぎでも昼食は後にし

てはやる気持ちのまま林の奥へと入っていくと、ミツバウツギの花はちょうど最盛期。手前にマルバチシャノキに似た白い花をいっぱい咲かせた大きな樹があるが、この花に芳香はなく蝶はやってきていない。渓流に近い位置のミツバウツギをみるとミヤマカラスアゲハが複数個体やって

きていて次々と場所を変えながら蜜を楽しんでいる。後翅が破損した♀は撮影対象外で、きれいな♂2 頭の動きをビデオカメラで追う。残念なのは吸蜜位置が常に枝が入り組んだ高い位置。それでも、枝の隙間に来る場面をねらってなんとかミヤマカラスアゲハを画面いっぱいの大きさで撮影はできるが、背景に太陽があって逆光の撮影となり美しい鱗粉色がとらえられないのが残念。上流側のミツバウツギを見に行くとオナガアゲハの♂が蜜を楽しんでいるが、例年ここでみるアオバセセリの姿はない。

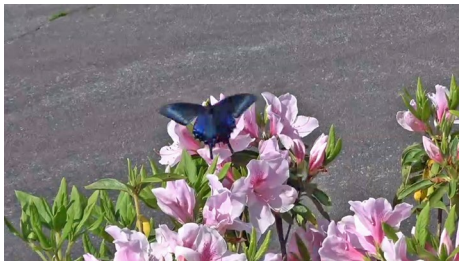
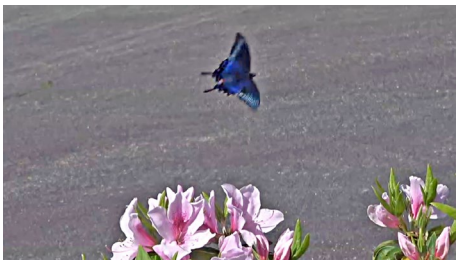
　簡単なパンだけの昼食をとりながら橋のたもとのナツグミを眺めていると、すばしっこい飛翔でアオバセセリが次々と場所を変えて吸蜜して回るのが目に入る。やがてミヤマカラスアゲハも

やってくる。なんとか両者の撮影記録をとって、ウスバシロチョウが期待できる観光りんご園へと移動。期待したりんごの花はもうほとんど散っていて、残るわずかの花を求めてウスバシロチョウが複数飛び交っているのがわかるが、今回も高い防護柵が張り巡らされた状態で中には入れ

ず、上から見下ろす形で、訪花する個体をズームアップ撮影するのが精いっぱい。風が強くなると葉上で休息し始める個体もみる。この花にはトラフシジミもやってきていて、ズームアッ

プ撮影で V 字開翅の指標と特徴的な裏面の模様もしっかり記録できる。りんご畑まわりにはスジグロシロチョウに混じってツマキチョウの♀もやってくるが、すぐに柵内へと飛んで行って撮影チャンスはなし。駐車場のそばに咲くヒラドツツジにはミヤマカラスアゲハとクロアゲハが吸蜜飛来し、りんご畑の防護柵の隙間に入り込んだミヤマカラスアゲハの♂がいて、何度も

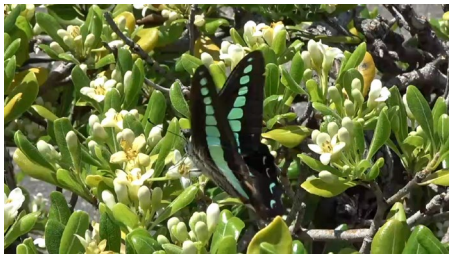
羽ばたいてようやく飛び出すことができたが、きれいな翅表にはかすり傷ができていた。ツツジの花周りを飛ぶ様子を撮影したなかからミヤマカラスアゲハ♂の美しい鱗粉色が垣間見られる場面を静止画像として切り取ってみても、フォーカスがあった記録はほとんどなくて残念。ヒラドツ

ツジにはスジグロシロチョウと帰る間際にウスバシロチョウもやってきて夢中で蜜を吸う場面の記録が取れる。

May 3, 2024　加古川市のシルビアシジミ調査 Ser. 6

　天気が回復した午前中、加古川市のシルビアシジミ生息地までサイクリング。途上、芳香を放つトベラの花周りを飛ぶきれいなアオスジアゲハが目に入り急ブレーキ。青紋に変異のない通常



個体で左前翅が少し欠けているが青色は鮮やか。
　約 40 分かけて到着したシルビアシジミの生息地は、背の高い植物に隠れるように咲くミヤコグサの黄色い花まわりを複数の♂が飛び交い、探雌飛翔の途中で日向ぼっこをしていた他の♂と鉢合わせをして追飛翔が始まるなど、楽しい光景が見られる。この日の期待はマツバウンランでの吸蜜シーンを見ることだが、高砂市の生息地と違ってここではマツバウンランが極めて少なく期待

はできそうにない。路面近くで地味な飛び方をしているのは♀でミヤコグサに産卵をする行動だ。その動きをよくみていると期待通りに産卵をしてくれる。産み付けられた卵は葉っぱを裏返す必要のない角度ではっきりと撮影記録が取れる。マツバウンランでの吸蜜はあきらめてミヤコグサで吸蜜する♂の撮影記録だけは確保して撤収。

May 4, 2024　テニスのあとで蝶観察

　テニスを終えた後、回り道をしてジャコウアゲハの生息地までサイクリング約 10 分。現地の平坦な草むらでウマノスズクサ群に幼虫の姿がないかと探してみるが、1 個の産卵を 2 か所で確認できるが幼虫は全く見られない。翅のかなり傷んだ母蝶が産卵場所を決めかねるような飛翔を繰り返しているのに気づき様子をみる。この母蝶が何度かウマノスズクサに触れるのに一向に産卵しようとしないのが不思議。母蝶は平坦部から土手斜面のウマノスズクサ群へと移っていくのでついて回るも、やはり産卵行動が見られない。やがて新鮮度が高い母蝶が現れるので、こちらが絵になると観察対象を変えてついて回る。この母蝶も全く同じ行動で、ときにはヨモギやノラニ

ンジン、さらにはベニシジミの食草であるギシギシの葉に触れたりもする。匂いを感じてくれないかとウマノスズクサの葉を手指で少し割いてみても飛翔行動に変化はなく、ずっとその気まぐれな飛翔を見守る。やがてここだと決めそうなホバリング飛翔となり、ついにお尻を葉裏へとま

げて産み始める。この日持参したカメラは OLYMPUS TG-6 でファインダーの角度が変えられないため、蝶を驚かすこととなる真横からの撮影ができず、撮影は正面からだけ。産卵を終えて飛び立った後で確認できた卵は 5 個。興味深いのはすぐそばの食草ではない植物の茎に、たぶん別の母蝶が産み付けたと思える 1 卵が観察でき、孵化した幼虫は少しだが食草までの旅を強いられる。この叢にはノラニンジンも多いせいかキアゲハの飛翔も見られ、ベニシジミもみる。

May 7, 2024　ジャコウアゲハの幼虫を観察

　丸一日のかなりの降雨が収まった正午前、高砂市のジャコウアゲハ生息地でウマノスズクサを見て回ると、ようやく幼虫が見つかる。もう成虫の姿はなく例年に比べて産卵数もあまりに少ない。ノ

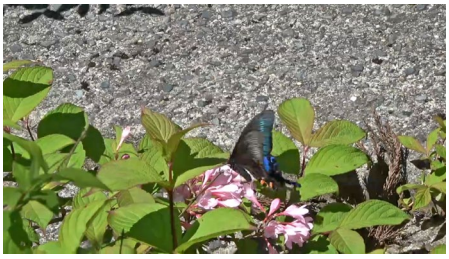
ラニンジンも新しい株がたくさんあるのにキアゲハの産卵も幼虫も見つからない。ギフチョウのあまりに少ない発生から始まって、今年は何かがおかしい。土手周りで目につくのはコメツブウマゴヤシの黄色い花とミチバタナデシコの可憐なピンクの花。

May 10, 2024　アオスジアゲハの卵と幼虫

荒井町新浜のタブノキ並木でひこばえの新芽を見て回ると、アオスジアゲハの卵と初令、中令幼虫が見つかるが、今回見て回った街路樹並木の多くで、ひこばえの枝打ちが徹底して実施されていて、ひこばえのある樹があまりに少ない。それでも「青少年のための科学の祭典」の蝶アルバム作成で子供たちに人気があるのがアオスジアゲハということで、今年もいくらか飼育をする計画。

May 14, 2024　宍粟市一宮に遠征

千年水での水汲みを計画に入れて高砂から約 80km の遠征。期待のタニウツギが満開ではないが道中のあちこちで咲いているのを見やりながら千年水に到着。過去の最盛期だと道中のタニウツギには必ず黒系アゲハが吸蜜飛来していたが、今回はまったく道中でそういう光景が見られず、やや不安。千年水からすぐ上の路上の湿り気にもアゲハはやってきていなく、そのまま奥の公文川沿いのタニウツギまで進む。樹木数が減ったタニウツギだが、斜面下の花をのぞくと複数の黒系アゲハの姿があり、ビデオカメラをもって注意深く斜面を降りる。見上げる形でいい撮影



角度が取れないが、やってきているのはミヤマカラスアゲハとクロアゲハでオナガアゲハの姿はない。残念なのは新鮮個体がほとんど見られないことで、できるだけきれいな個体を探して撮影に集中する。川沿いに小さな樹が 3 本ほど並んで開花していて、その花を訪れるミヤマカラスアゲハが羽ばたく動作で翅表のきれいな鱗粉色が垣間見られ、その状況を撮影できたのが本日の唯一の成果。ウスバシロチョウの飛翔も見るが撮影チャンスはなし。千年水が湧き出るそばの山肌には今年もシライトソウとフタリシズカの花をみる。千年水を準備した容器すべてにいっぱい汲み込んだあと、今一度奥のタニウツギ周りで 30 分ほど過ごし、鉢植えで 1 本だけ管理しているキハダに産卵させるつもりで 1♀だけ捕獲して撤収。

May 17, 2024　ヒメヒカゲ初見：生息調査 Ser. 1

もしかして発生しているかもしれないと、サイクリング約 1 時間でヒメヒカゲの生息地まで河川敷を走る。往路は追い風で快適だが、帰路が思いやられる。途中、スイカズラが満開状態

の場所でアサマイチモンジの飛翔を認め、少し粘ってみたが飛翔場面以外に撮影チャンスはなし。現地についてすぐに1♂の姿を見つけ、近づいては飛ばれてしまうという繰り返しでその飛翔

をビデオカメラで追い続ける。何度か止まってくれた状態を撮影記録し、蛹も探してみるがそう簡単には見つかりはしない。となりの山肌まで確認したが、発生個体は最初の1個体だけで、すでに翅が傷んだヒメウラナミジャノメとキタキチョウをみる。この草原にはクモキリソウが咲いているがイシモチソウはまだつぼみ状態。これまでコウゾだと思っていた黄色い花をつける小木は名前を調べなおす必要があり、撮影記録をとる（検索の結果ガンピだと判明）。帰路、エノキ周りで探雌飛翔を繰り返す複数のゴマダラチョウの飛翔を観察。葉っぱに止まって休息する個体は右後翅がいくらか傷んでいる。

May 20, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 2

「加古川の里山・ギフチョウ・ネット」によるヒメヒカゲの生息調査が 5/18 に始まったが、筆者以外からの情報はまだなく、5/17 の発生確認から 3 日を経て雨も上がったことから二度目の調査にいく。11 時 25 分から草むらをくまなく探すもヒメヒカゲが飛び出す気配はなく、トランセクト調査の No.2 から No.6 までを歩いてみたがタツナミソウが開花しているのをみただけで、ヒ

メヒカゲの蛹をみつけた湿地帯周りでは「柳の下にドジョウはいない」を思い知る。この細道沿いでハラビロトンボとシオカラトンボをみただけで、ハンノキにミドリシジミ幼虫がつくるギョウザもみつけられないまま No.30 地区にもどる。すっかり開花したコモウセンゴケとイシモチソ

ウの記録もとって今日はもうだめかと帰りかけたそのとき、草むらの中央部でようやくヒメヒカゲが飛ぶ。何度か止まっては飛ばれるという状況を繰り返しながらその動きを追うと、結局はNo.30 地区の開けた草地のほぼ全域を歩くことになる。ビデオ撮影記録をみなおすと開翅場面の記録もとれており、5/17 の記録とくらべてみると同一個体だと思われる。

May 24, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 3

三度目となる発生状況調査は河川敷経由のサイクリング。変速ギアを最速として寄り道せずにスイカズラの花が咲く場所まで 45 分。今日もアサマイチモンジが飛んでいるが探雌飛翔を繰り返すばかりの♂で、撮影をあきらめて No.30 地区へ。草原手前でリュックを草陰に置く間もなくヒメヒカゲが飛ぶ。後翅の眼状紋の特徴がわかるように撮影記録をとり、あとで比較確認して少なくとも 5/18 の初見個体とは違うことがわかる。同じ場所で灰色のジャノメチョウが飛び出し、イノシシよけの防護柵を抜けたイヌツゲの茂みへと移動してとまる。真正面からは翅を閉じた状態でヒメウラナミジャノメかウラナミジャノメかが判別できない。低い位置から裏面の特徴を撮影しようと試みるあいだに、少し態勢をかえてくれたことでウラナミジャノメだとわかる。今年の

初見でかなり早い発生記録と思われる。同じ場所であまり動かないため、防護柵にカメラを固定してズームアップ撮影をすると、小さなイヌツゲの花に口吻を伸ばして吸蜜していることがわかる。

最初にみたヒメヒカゲはどこに行ったのか姿が見えず、No.30 地区を一周しても新たな個体は見られない。クモキリソウはもう花が終わり近い状況で、念のためヤマトキソウはどうかと探してみると、なんともう 2 か所で開花している。これも今までで最も早い開花だと思われる。

ウラナミジャノメが出ているのであれば、ケネザサの多い小道沿いも確認しておこうと歩いてみたが擦れたヒメウラナミジャノメがいただけ。ついでに No.31 地区のヒメヒカゲはどうかと坂道をのぼると♂が飛び出す。ここでの発生としてはずいぶん早い印象で、すぐに飛ぶ個体について回ってコシダの茂みなどを踏み倒しながら撮影記録をとる。ほっとして足場のいい草地にもどると別の個体が飛び出す。後翅裏面の模様が♀に近く、翅縁に鉛色の筋模様も見えるが前翅にはないことからやはり♂。このあと登山靴の右足かかと部分に痛みを感じ、確認するとなぜかノイバラのとげが靴下に絡みついている。靴ベラなしでははきにくい登山靴に苦戦中、また新しいヒメヒカゲが飛び出す。どこに止まるのか見失わないように目で追いながら靴ひもを結びなおし、再びブッシュ内を飛ぶヒメヒカゲを追いかける。撮影できた個体は黒っぽい♂でこの場所で 3 頭目となる。

帰路は河川敷でコムラサキの発生に注意して走る。川沿いにカワヤナギは多いがコムラサキが飛ぶ様子が見られないまま、最後のマイポイントに着く。道路からカワヤナギまでの間にはナヨクサフジが繁茂して環境が一変しているが、ヤナギ周りを飛ぶコムラサキが確認でき、自転車を

止める。枯れた背の高いイネ科植物を踏み倒しながらヤナギの近くまで進むと、高い位置の葉上で休憩する個体がみえる。ズームアップ撮影で今年の発生証拠記録をとり、撮影に適した位置にとまってくれないかとコムラサキの動きを追うと、枝葉の入り組んだ奥へと潜り込む個体がい

る。よくみると高い位置の幹にカナブンらしき甲虫が 2 頭いて樹液が出ていることがわかり、コムラサキが吸汁し始めている。ほぼ真上をみながらのズームアップ撮影でときおり見せてくれる翅表にわずかに紫色がみえるので♂だ。もっと下からいい角度はないかとヤナギの根元近くまで降りたが目的に沿う角度はなく、たまたま近くの葉上にとまった個体を裏面から撮影する。結局、元のブッシュ踏み込み位置に戻ると、別の幹にも樹液が出ていて、シラホシハナムグリとコムラサキの♀が夢中で吸汁している。その様子を撮影して本日の目的を果たした安ど感をもって自転車へともどり、最後はジャコウアゲハの幼虫がウマノスズクサを摂食している様子をビデオ撮影し、土手斜面にも一目 10 頭以上の幼虫が見られることを確認して撤収。

May 26, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 4

「加古川の里山・ギフチョウ・ネット」の北岡氏から 5/25 の調査結果が報告され、No.30 よりも No.31 地区が多いという例年とは異なる状況。No.31 での調査数値に重複があるかもしれないとの説明もあって、本日初めて翅へのマーキングをする。この日もやはり No.30 で 1♂（後述の大久保氏から 2♂をみたとの情報あり）のみ、No.31 では 8♂1♀で初めて♀の発生を確認。実は、筆

者が現地に着いた際、神戸 No.の車が先着していて、調査を終えて戻った時点で宝塚からの大久保さんだと自己紹介をしてくださり、ヒメヒカゲの撮影目的での訪問だと。「加古川の里山・ギフチョウ・ネット」のメンバーの大半をご存じで、驚いたのは、この生息地に無断で侵入した採集者が、マーキングをした個体を捕獲した際に悪意を持って殺傷しているという話。とても許せない蛮行で、これからのマーキング調査をどうすればいいのか困ったものだ。大久保さんは宝塚のギフチョウ生息地でも横柄な採集者に会うことがあるといわれ、絶滅危惧種だと知って採集する奴らが許せないと憤られる。本日はヤマトキソウの 9 輪の開花をみたがウラナミジャノメには

会えず、他の観察種はアゲハ、モンシロ、アサマイチモンジ、そしてヒメウラナミジャノメ。24日にみたルルシジミはみられず撤収。

May 29, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 5

現地に着いた 11 時 15 分、大畑さんのオートバイがあって先に撮影中だとわかる。話を聞くと2♀をみていて 1 頭の左裏面の褐色鱗粉が薄い変異個体で、撮影記録をあとでメール配信してくださると。筆者の調査ではその個体には会えず、大畑さんと合わせて 9♂2♀の確認で終わる。調査を終えて車へともどるとエノキの梢にゴマダラチョウがとまる。その撮影をしていると若い男性

が乗り入れてきて「ヒメヒカゲはいますか？」と聞いてくる。「少ないけどいるよ、撮影だけだよね」と念を押して分かれたが、信じるよりほかなし。

May 30, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 6

調査は 14 時半から。神戸ナンバーの車がとまり、男性一人が撮影をして回っている。声をかけると神戸からだという牧氏。10♂3♀とウラナミジャノメ 3 個体をみたとのこと。筆者のいつもの

30 分間調査では 12♂3♀で、牧氏に聞いた数とほぼ合う感じ。

June 1, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 7

調査は 12 時 15 分から。あいかわらず♀が少なく確認できたのは 11♂1♀。ウラナミジャノメは3♂2♀。ヒメヒカゲの♀のきれいな画像が初めて記録でき、草葉に口吻を伸ばす場面も撮影記録で

きる。また、ウラナミジャノメの裏面に異常に黒鱗粉が濃い部分のある変異個体も記録。ウラナミジャノメの新鮮な♀はV字開翅のサービスもしてくれる。他のチョウはいきなり飛び出てきたムラサキシジミの♂と、ヤナギハナガサの花蜜を楽しむ清楚なモンシロチョウ。

June 2, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 8

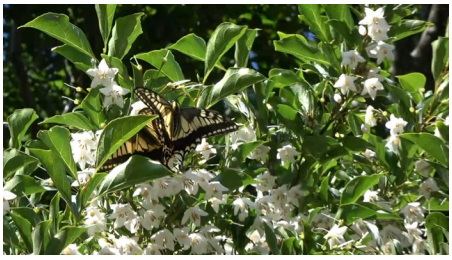
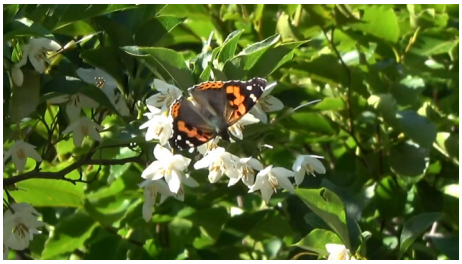
いったい♀の個体数はいつになったら増えるのか、そのことが気になって連日の調査は10時15分から。♂の数は増えて後翅外縁の鉛銀筋がはっきりした個体も含めて15♂となったが♀は今日も1個体のみ。後翅裏面の眼状紋と白帯の発現に差があることから昨日とは明らかに違う新たな発生個体だとみなせる。ツバメシジミの新鮮♀が後翅のオレンジ紋を開翅して見せてくれるので撮影しておく。きれいなルリシジミの♀はイヌツゲの新芽に産卵しているようだ。ヤマトキソウは順調。

June 4, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 9

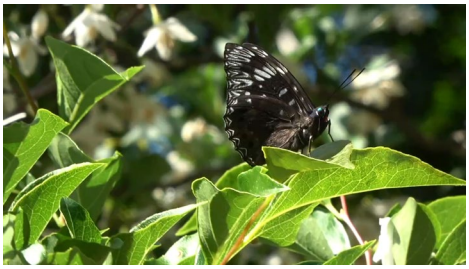
11時5分からの調査で12♂2♀と、いぜんとして♀の発生数が少ない。ウラナミジャノメは2♂1♀。

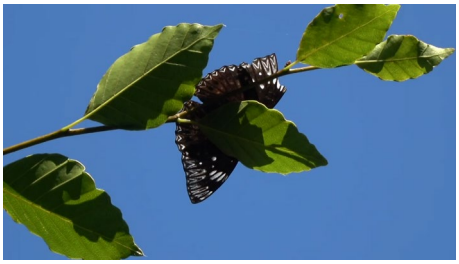
June 5, 2024　来日岳（567m）に遠征

目的はフジミドリシジミとウラクロシジミで、到着してすぐにコナラの高い位置の葉裏にとまるゼフィルスを発見。イランの新しい蝶友のために捕獲して確認したかったが、うまくネットインができず種名もはたしてフジミドリだったかどうかわからないまま。次いで、ブナの木に近くで再びゼフィルスらしき個体が目に付くが、またしても捕獲に失敗。目の前をひらひらと飛んで行ったのは紛れもないウラクロシジミの♂。こちらは夕刻になればまた会えるだろうと深追いもしなかったのだが、この後二度と現れることはなかった。ヒサマツミドリシジミがテリ張りによくやってくる場所は、エゴノキの大きな木が花をいっぱい咲かせていて、キアゲハとアカタテハが吸蜜にやって来たところをビデオ撮影。アオバセセリもくるがすっかり色あせた個体で撮影意欲

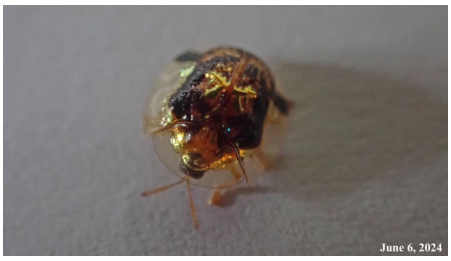



もわかなく、証拠的記録のみ。そのあとスミナガシが 2 頭やってきて、エゴノキの近くで新鮮度はまずまずだが、もう一方は翅を全開で葉先に止まった時点で前翅が一部破損した個体であるこ





とがわかる。ウラクロシジミも期待した夕刻タイムになっても現れてくれないまま撤収。帰宅後、車の中にきらきら光る虫がいたと妻がティッシュにくるんでもってきたのはジンガサハムシ。ヒルガオの葉を食べるとわかって近隣を探し、ジャコウアゲハの生息地に咲いているのを見



つけてタッパウエア内でしばらく飼ってみる。

June 7, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 10

14 時 10 分からの調査で 13♂9♀と、一気に♀の発生数が増えてきた。ウラナミジャノメは 3 個体を確認したが、ヒメヒカゲの♀に対する関心が強く、うれしいことに交尾ペアにも会

えたこともあって、本日ウラナミジャノメの撮影記録はなし。

June 8, 2024　来日岳（567m）に遠征 Ser. 2

場合によってはどこかで車中泊をしてもいい、と妻が準備してくれて来日岳まで二度目の遠征。フジミドリシジミとウラクロシジミのリベンジだが、フジミドリシジミにはこの日も会えず。最初のゼフィルスはアカシジミでコナラの葉を叩いていたら力なく落ちてきて路面に止まっても飛ぼうとしない。どうやら羽化して間もないようで、濃いオレンジ色が美しい。これはイランの蝶友も喜ぶだろうとピンセットでそっとつまんで三角紙におさめる。山頂部の反対側へと歩いても擦れたアオバセセリの忙しいテリ張り飛翔がみられただけ。赤ネットをもっているとキアゲハが執着してまとわりつくので、そのままネットインすると後翅がひどく傷んだ個体とわかり放してやる。ずっと曇り空で風も強いせいか 5 日にみたスミナガシの登場はなく、ウラクロシジミに期待

して場所を移動。以前に複数個体の飛翔を見た場所で粘り強く待つと、17 時をすぎてようやく白銀を輝かせた 2♂の卍飛翔が展開する。その絡みの飛翔が解けると、お互いが離れた位置の葉上に落ち着くが、わずかに花が咲くタニウツギの葉上に落ち着いた個体がビデオ撮影に適しているとわかり、フリーハンド＆ズームアップ撮影に注力する。ときおりわずかに翅を開く動作をしてくれることで、翅表の白銀色が垣間見られる。もう一方の個体は右後翅が少し傷んでいて尾状突起もかけている。昨年は V 字開翅姿勢の撮影ができたが、露出オーバーでせっかくの翅表の美しい輝きを記録できなかった。今年こそはと露出をめいっぱい絞り込んで臨んだが、期待通りの開翅はしてくれないまま。イランの蝶友用に尾状突起がそろった個体を捕獲し、さらなる個体の登場を待ったが風が弱まることなく気温も下がり気味と

いうことで撤収を決断。車中泊もありうるとの覚悟だったが、明日の天気もよくないこともあって日帰りとすることに。道中にみるジギタリスや崖の高い位置に群生するホタルブクロを撮影しながら山を下る。途中、ニホンジカを 2 頭目撃。5 日とほぼ同じ時間帯に加西イオンセンターで夕食を調達し、22 時半ころに帰宅。

June 10, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 11 シルビアシジミ Ser. 7

現地到着 14：45。先行の神戸ナンバー車が止まっていて、調査のために長靴に履き替えていたら、目的不明の 2m ほどの棒を持った男性が土手上を引き上げてくるのが目に入る。この車の持ち主なら目の前の階段を下りてくるはずなのに土手を進んでいく。当方を気にしての行動だと思え、さては密漁者かと不安がよぎるが会って話ができないので確かめようがない。

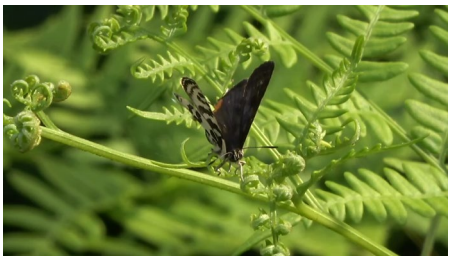
14：50 から調査を始めるといきなり♀が 2 頭飛び出し、結局 30 分間で 4♂15♀と、ようやく♀の数が増えて一安心。あの男性が採集者であればこの観察数はありえない。男性は例の車までもどり、妻に少し車を移動してほしいと話しかけてきたという。明らかに筆者をさけて階段を降りてこなかった行動が気に入らないが、ヒメヒカゲの観察数からカメラ撮影目的だったと推測。本日のヒメヒカゲの撮影では逆光とは思えない撮影角度で開翅した際に裏面の模様が透けて見える個体を二度も観察。2 個体目はイヌツゲで吸蜜していたと思える場面で、左後翅表黒点模様の上の白点はすり傷によるものと思える。ヒメヒカゲ以外ではウラナミジャノメの交尾ビペアを 2 組観察。実は 1 組目は交尾中だとは気づかずに撮影記録を撮っていて、帰宅後の整理中に確認できたという摩訶不思議。発生個体数が増えたヒメヒカゲの♀を集中的に撮影したため、ウラナミジャノメもいるなとついで感覚で撮影したそのいい加減さが交尾中であることを見逃していた。

この日の次のトピックスはシルビアシジミがいたこと。調査を終えて土手へと戻った目の前にヤマトシジミがいるなと気づいてよくみるとどうも違う。間違いなく新鮮ぴかぴかのシルビアシジミで、やがて開翅した時点で♀だとわかる。以前によく見たミヤコグサを探してみると、まったく見つけられず、どのような経緯でここにいたのか見当がつかない。Facebook に投稿すると、シロツメクサで成育した可能性をコメントしてくれる人もいるが、加古川周辺ではシロツメクサを食草として自然発生をした例は確認できていなく、新たな課題となる。

June 11, 2024　キマダラルリツバメの継続発生を確認 シルビアシジミ Ser. 8

京都の蝶友が早くからキマダラルリツバメの情報を発信していて、筆者としては今年初めて観察に行ってみる。現地には明らかな撮影者がやってきたとわかる踏み跡があって、キマルリが出ているのは確かだと推測できる。15 時 40 分から粘ること 1 時間。アカシジミとルリシジミの飛翔がみられただけでキマルリは全く姿を見せない。気温が高いせいだと勝手に判断して妻には 17 時までは待ってみると伝え、その待ち時間中にミヤコグサが点在する草地でシルビアシジミはいないかと探してみる。するとミヤコグサの花蜜を求める個体がいる。注意して観察すると♀だ。その撮影記録をとっていると♂も現れ、その動きについて回ると、ミヤコグサやコメツブウマゴヤシで吸蜜したり、草葉上で開翅してくれたりする。

あとで撮影記録時間をみて 16 時 50 分だとわかる時点で、ようやくキマルリがきらきらと青白く光りながら飛び出す。近くの草葉上に止まる前の忙しい飛び方を目で追い、やがてシダ類の葉上にとまったことを確認してそっと近づく。残念なことに頭をこちらに向けた姿勢のため、きれいな翅表の青色がみえない。過去にはくるりと向きを変えてくれるサービスがあったが、この個体はそのような配慮をしてくれないまま飛び立ってしまう。その後、眼前 7m ほど離れた木々の梢部分で少なくとも 3 個体の追飛翔が何度も繰り返され、ときにはコナラの葉上で休息し始める。ビデオカメラの 250 倍ズームアップ撮影を試みると、三脚なしでも画面内にとらえることができるが光学ズームにくらべて画質が悪くフォーカスが合わない。開翅姿勢をとる個体のぴんぼけ記録では後翅にも幅広く青鱗粉が発達した個体だとわかる。あきらかに青白い輝きはなく褐色がみえることでトラフシジミ同志と思える卍飛翔も展開する。目の前で繰り返される追飛翔ばかりを眺めて 17 時半まで待ったが手前に来てくれる個体はなく撤収。



帰宅後に蝶友の立岩さんの観察日誌をみて、例の踏み跡は彼と竹内さんらによるものとわかるが、その動画記録には見事に翅表の青色が記録できている。

June 13, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 12 by Cycling ＆ 雑郷に遠征

体力維持もかねて自転車を踏み、現地到着は加古川河川敷で想定外の向かい風を受けて 50 分後の 10:25。気温が高くて叢は蒸し暑く、飛び出す蝶はベニシジミとツバメシジミ。草原の奥深い影もある部分でヒメヒカゲとウラナミジャノメが飛び出るが個体数があまりにも少なく、ヒメヒカゲが 4♂3♀でウラナミジャノメは 1♂1♀だけ。No.31 とトランセクト調査地でも合わせて 2♂3♀。

湿地帯で黄色いミミカキグサが複数咲く場所で近接撮影に苦労する。ハンノキの木のまわりにミドリシジミの姿はみられず、カキランもどこにも咲いていない。ルリシジミがハギの新芽に産卵する様子を眺めながら撤収。帰路は追い風だと思っていたのに、往路よりきつい風を正面から受け、足の筋肉が悲鳴を上げる状態でやっと戻った裏の公園ではユキヤナギ周りをホシミスジが飛んでいる。

午後はミドリシジミの発生に期待して雑郷までいってみたが、ハンノキの葉を叩いてもまったく飛び出すことはなく、ケネザサの茂みでヒカゲチョウを見ただけに終わる。

June 14, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 13

気温が高い時間帯を避けた調査目的で 15 時から現地に入る。観察できたヒメヒカゲは 2♂6♀で確実に♂の数が減ってきており、比較的きれいな♀もいるが翅の傷んだ個体が増えている。ウラナミジャノメは 1♂1♀とこちらも少なくなっている。本日の興味深い挙動として、筆者の接近撮影

を嫌がって飛んで逃げた同一個体がノイバラの白い花にとまるが吸蜜はしていないという動きを二度もみせたこと。この習性は過去にも何度か観察していて、2021 年にはマーキングをした直後に「危ない目にあった」と解放された後きまってノイバラの白い花弁にとまる動きをみせる個体を複数観察していて「撮影で近づきすぎて飛ばれた後も、再びノイバラの花にとまる理由がいまだによくわからない」と記述している。

June 17, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 14

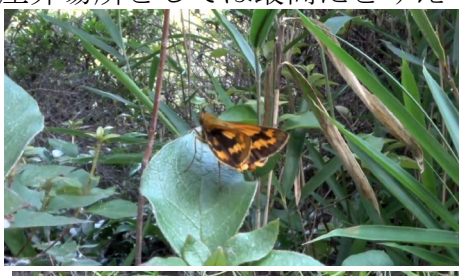
加古川に架かる水管橋が川面に映りこむ光景がみられる風の弱い日の生息調査は 11 時から。観察できたヒメヒカゲは 2♂3♀でウラナミジャノメは 2♂1♀。やっとカキランの開花がみられるが株

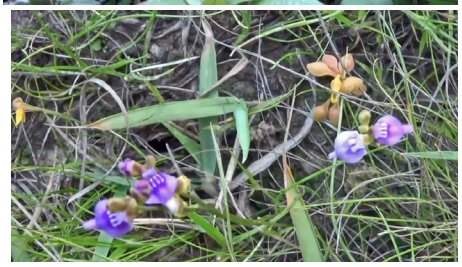
数は少ない。湿地帯のミミカキグサは花の数が増しているがムラサキミミカキグサは全く出ていないのが不思議。車へともどる途中のハリエンジュやハギ類で発生したルリシジミがきれいなブルーの翅表を輝かせて飛ぶ姿が目に楽しいが、撮影記録は静止した状態しかとれない。

June 19, 2024　ヒメヒカゲ調査 Ser. 15

あえて暑さが確実に和らいだ 16 時過ぎからの調査で観察できたヒメヒカゲは 30 分間では 3♀だけで♂の姿とウラナミジャノメは確認できず。本日はヒメヒカゲの卵を見つけることを目的とし、♀をみかけた近くでコイヌノハナヒゲを注意して観察する。3 個体目の♀をみた周辺にイノシシが

掘ったと思われるくぼみに水が溜まっていて、そのそばをよくみると 1 個だけ卵が見つかる。数年前には小道沿いにも簡単に産卵が多くみられたのに、最近では卵の発見が難しい状況が続いており、この卵以外の産卵が見られないのに合点がいかないがそれが現実。トランセクト調査のルート上でヒメヒカゲの♀1 個体をみる。時刻は 16 時 53 分。近くに産卵場所としては最高だとみえるコイヌノハナヒゲが群生しているが、卵を探してもまったく見つけられない。ハンノキの林立する場所にミドリシジミが飛ぶ気配のないのが寂しい。ケネザサが多い場所でキマダラセセリが目いっぱいの開翅姿勢を見せてくれるのはうれしいが、例年複数個体を見ないのが不思議。黄色いミミカキグサがあいかわらず多く咲いたままの状況を確認して元の観察地にもどる。30 分間の調査時間内にはみなかった翅がかなり傷んだヒメヒカゲの♀が飛び出して間歇的な翅の開閉を繰り返す。その撮影を終えて撤収しようと踏み出した足元に思いもしないムラサキミミカキグサの狭い範囲ではあるが群落が目に入る。例のひょうきんな花模様が複数でこちらに微笑む。





June 20, 2024　思いがけない電話

朝 9 時過ぎの思いがけない電話は国土交通省から：「高砂市のジャコウアゲハ生息地の除草が近いが、ジャコウアゲハ対策は？」との問い合わせ。2022 年まで担当者が変わってもきちんと引き継いで電話やメールで相談してくださっていた案件で、2023 年からは何もしないで自然に任せるとしてあった。今年は除草時期が近くなって第二化の羽化が始まり、路肩 1m 幅の兵庫県による除草が終わって路肩部分のウマノスズクサは根を残して 1 本も残っていない。このままでは土手斜面内に卵や幼虫がいる状況で食草が刈り取られるのは避けられなく、対策を思案していたところへのなんともありがたい電話で都合のいい日時に現地で打ち合わせをすることに。以前同様、ウマノスズクサが多い路肩下から 1m 幅にロープを張って草刈りをしない領域を下請け業者に周知徹底してもらうこととなる。当日は、Facebook 友ともなっている高砂市在住でご自宅にウマノスズクサを植栽され、中筋地区でのジャコウアゲハの生息を確認されたこともある小山さんにも伝えて現地で合流する。

6/22：すでに第二化の母蝶が飛び交っていることから、いずれ高砂市が除草する平坦部のウマノスズクサを確認し、87 卵、孵化したばかの初令 6、中令 1，終令 3 頭の幼虫を回収。卵はすべて孵化させてから、初令、中令幼虫とともに土手斜面の保護領域に残るウマノスズクサに戻し、終令幼虫は蛹としてから戻す。

June 21, 2024　ヒメヒカゲ調査　Ser. 16

ヒメヒカゲの発生状況調査は No.30 地区で♂が見られなくなっていることから、もう最終章でいいのではと思わせる、翅の傷んだ♀が 3 個体だけ。トランセクト調査ルートを歩くと 1♂1♀が観

察できるが、経年推移のデータとしては採用しない。ウラナミジャノメもトランセクト調査ルート上で 1 個体をみるだけで、本日は、周辺にユキヤナギやシモツケ類などの食樹がみられないのに飛び古したホシミスジが飛び遊んでいたのが不思議。

June 24, 2024　ヒメヒカゲ調査　Ser. 17

妻が円照寺の花を観に行こうというので、それなら 6/21 を最終としたヒメヒカゲの調査も追加実施できると納得してもらって現地到着 13:35。発生状況調査はいつもどおり 13:40 からの 30 分間で、すぐにみたのは大型のジャノメチョウ。本種の習性として止まった場所ですぐに翅の開閉

動作をしてくれる。新鮮ピカピカの個体なので眼状紋内の瑠璃紋が美しい。ヒメヒカゲはなかなか姿をみなかったが、始めに 19 日に観察できた卵のある場所周辺で次の卵を探すと、コイヌノハナヒゲの枯れた葉先部分への産卵 1 が目に入る。接写拡大撮影は難しく、証拠記録で我慢し、先日の卵を探してみるがなぜか見つからない。それ以上この湿地帯での卵調査はあきらめて草むら

を歩くとようやくヒメヒカゲが飛ぶ。間違いなく新鮮度が落ちた♀で、二三度止まる場所を変える動きについてまわって撮影記録をとる。産卵はみつからないかと他の部分でも目を凝らすが見つけられず、新たなヒメヒカゲの♀が飛び出す。眼状紋と後翅の白帯の形から間違いなく 2 個体目だと確認でき、この個体についても何度か飛ばれる動きについて回る。あまりとらない逆さどまりの姿勢から急反転して態勢をもどす動きが愉快で、ビデオ撮影でその一連の動きが記録できる。この 2 個体目のヒメヒカゲをみたすぐそばのケネザサまわりでキマダラセセリの新鮮個体が飛び遊んでいるので撮影記録。ムラサキミミカキグサがまだ咲いていることを確認して調査を終えようと歩きだす目の前でオオチャバネセセリがケネザサの葉上へと飛来してとまる。もうこの草原での調査は終わりにすると決めて田園地帯へと降り立った目の前にツバメシジミの交尾ペアがいる。ヨモギの葉上で静かに愛を育む姿を撮影して撤収。

June 25, 2024　国土交通省担当者と現地打ち合わせ

14 時前、国土交通省小野出張所の竹ノ内さんと、除草作業を請け負ってくださる福谷建設からの 3 名、そして荒井町の小山さんと現地でウマノスズクサを残す領域を、路肩部から 2m 弱、道路沿い水平距離 45m の範囲にしてロープ張りをしてくださることに。ちょうどジャコウアゲハの♂が飛来してみんなの周りを飛んでくれ、小山さんが路肩部の状況とともに写真記録を撮ってくださる。

June 26, 2024　須磨離宮公園に遠征（シルバーパス利用）

花菖蒲園は盛りを過ぎているが、水面への映り込みを探して撮影記録を楽しむ。チョウトンボ、ショウジョウトンボ、モンシロチョウが花周りで観察でき、あとは睡蓮、コウホネをみてバラ園へと急な階段をのぼる。バラ園にはユリの花も追加されており、さっとみるだけ。

June 27, 2024　朝はジャコウアゲハ生息地、午後はヒメヒカゲ最終調査 Ser. 18 (Final)

朝早く、雨露の残るジャコウアゲハ生息地で土手斜面へと踏み込んで、卵と幼虫を探して回収。深いくさむらの葉が少ない小さな株への産卵が目立つのは、孵化後の幼虫に新たな食草を探す試練を与えて、あえて生命力が強い個体だけが次の世代へとつなぐようにとの母蝶の戦略だと推定している。同じような産卵戦略はギフチョウやヒョウモンチョウの仲間でも観察している。この日は、母蝶が除草対象となる部分の

ウマノスズクサに産卵しないようにウマノスズクサは茎ごとちぎりとっておく。回収した卵と幼虫は除草対象外としてロープを張ってくれた保護区域へと移すのだが、卵のついたウマノスズクサはすぐにしおれてしまうことが孵化にどのような影響が出るのかわからない。本来、持ち帰って孵化させた後に幼虫をここに戻すのが確実な方法だが、何度も飼育をすることが負担となっているのは否めなく、路肩部分のウマノスズクサが多い部分に投げ込んでおく。

午後は 14:50 からヒメヒカゲの生息調査最終章。草原へと踏み込むといきなり複数のジャノメショウが飛び出してくる。この様相はヒメヒカゲの発生が終わって入れ違いにジャノメチョウが出てくるという、毎年見られる傾向だ。ジャノメチョウは驚いて飛び立ってもすぐに近くの草葉上にとまって翅の開閉を繰り返す習性があって、新鮮個体の眼状紋には瑠璃色の紋が輝いて美しい。

肝心のヒメヒカゲはなかなか姿を見せず、6/24 に確認した卵の近くで新たな産卵はないかと調べてみるがまったく発見できない。数年前には、トランセクト調査のルート小道沿いでもコイヌノハナヒゲ、ヒカゲスゲ、ショウジョウスゲなど、珍しい例ではケネザサの葉先などに、卵の発見になれた目で容易に見つけられたのがウソのような最近の状況に合点がいかない。この産卵調査の途上でようやくヒメヒカゲの♀が飛び出してくれる。すでに多くの産卵をすませたのか、目の前で産卵してくれることはなく、さらに現れた♀はこの時期には珍しく翅に傷みがなく、開翅して見せてくれる翅表もほとんど擦れていない。接近撮影を嫌って次々と止まる場所を変える動きについて回るが、この個体も産卵する動きはみせてくれない。翅に傷みがないということは羽化してあまり日を経ていないと思われ、6/24 以降に♂の観察ができていないことを考えると、もしかしたら交尾相手がいない状態で時が過ぎた可能性もある。

その他に観察できた蝶は、今年初見のホソバセセリと大体同じ場所で出会えるオオチャバネセセリ、そしてごく普通種であるが日本固有種とされるヒカゲチョウ。第二化として発生したヒメ

ウラナミジャノメは眼状紋周りの黄色が目立ってとても美しい。本調査最終日はムラサキミミカキグサが黄色い花のミミカキグサが咲く湿地帯にも遅咲きで開花しているのが確認でき、雨降りでたまった水のせいで水中花となってしまった花も見る。今年は株数が極端に少なかったネジバナを愛でて 2024 年のヒメヒカゲの発生状況調査を終える。

June 29, 2024　西播磨に遠征

兵庫西播磨の大撫山（435m）に遠征（片道 72km）して準絶滅危惧種（near threatened）のオオムラサキとキマダラモドキの発生状況を調査。シナノキの薄黄色の花が満開で芳香を放っていて、ミドリヒョウモンなどのいろんな蝶が集う様子をビデオ撮影。オオムラサキには出会えず、諦めかけた 13 時半すぎ、笹竹の茂みから飛び出たキマダラモドキ 1♀がコナラの樹肌に止まってくれて初観察。乏しい樹液にはカナブンと複数のヨツボシケシキスイがみられるだけで蝶はいない。

ジャノメチョウが多くみられるはずの西はりま天文台がある山頂部へと移動。自動車道路ぞいに芳香を放つ花が満開状態のシナノキがあって、ハナアブなどの小昆虫類が集まっている。蝶は手前のシナノキで翅の傷んだミドリヒョウモンが夢中で蜜を吸っており、奥のシナノキにはこれまた翅が傷んだツマグロヒョウモンの♀がみられる。やがて比較的きれいな♂もやってきて蜜を楽しむ。ミドリヒョウモンがいる花にはオオウラギンスジヒョウモンもやってくるが少し吸蜜をしてすぐに姿を消す。よくみれば小さなキマダラセセリとルリシジミもやってきているのがわかる。下草が刈り取られた雑木林にジャノメチョウの姿はなく、笹竹の繁る部分にキマダラモドキもいない。オオムラサキが期待できそうな樹液が少し出ているところにカナブンはいるが蝶の姿はない。天文台の近くのよく知られた樹液食堂を確認しにってみて愕然となる。樹液が出ていた部分に幅広の白いビニールテープがぐるぐる巻きにまきつけられているではないか。こうした処置は数か所にみられ、自然の景観さえぶち壊す意管理人の無謀な処置に怒りすら覚える。

このあとトラフカミキリがみられた大きなクワノキをみに行ってみたが、スイーピングをしたネットにはキボシカミキリが入っただけ。湿り気が多い路面ではコチャバネセセリが吸汁し、ウラギンシジミの♀もみるが、2 年ほど継続して見られたゴイシシジミはいない。コチャバネセセリの撮影中に軽トラでやってきたおじさんが、この場所のナラガシワのまわりに今年もネットマンがきてゼフィルスを採集していたと話してくれる。ウラジロミドリやヒロオビミドリシジミがみられる環境で、遠くは千葉からもきていたというから悲しくなる。

July 4, 2024　ジャコウアゲハ幼虫を移動

高砂市による土手下平坦部の除草が近いことから、ウマノスズクサを調べて歩くと初令から終令までの幼虫が 42 頭、産卵

も 3 個みつかる。先に回収して蛹にまで飼育した 3 個体と合わせて路肩下の保護域へと移しておく。路肩部に残るウマノスズクサを見て回ると、茎部分をかじる幼虫などが観察でき、国土交通省による除草後にはこの保護域の草ぼうぼうが目立ってしまうため、いずれ背の高いノラニンジンとセイバンモロコシは刈り取るつもり。

July 5, 2024　高砂市のシルビアシジミ Ser. 9

曽根と阿弥陀地区のシルビアシジミの発生状況を観察。曽根地区は秋の除草以降に草がはびこってミヤコグサが埋もれてしまっているが、点々と黄色い花はいみられ、30 分ほどのねばりでようやくミヤコグサの花で吸蜜中の個体を見つける。風が強く吹き抜けるため、撮影角度を変えたとたんに飛び去られるが、そのときに♂だとわかる。

阿弥陀地区は最近除草したことがわかる状況で、数の減ったミヤコグサをみてまわると、ヒメジョオンやミヤコグサを転々と移動しながら蜜を求める♀をみる。久しぶりにヒメジョオンで長い間吸蜜してくれる場面があって、きれいな撮影記録がとれる。♂もみるが個体数は少ない。

このあとジャコウアゲハの状況をみに市の池公園へと転戦。ウマノスズクサには終令幼虫が 20 頭ほどを観察でき、ここでの発生は順調だと確認。事務所内では野草展が開かれていて、多くはフウランだが、販売コーナーで妻が縞ツルボという変わった葉っぱの鉢植え（右端）をみつけ、小さなピンクの花が咲くこと、日当たりのいい場所に置くこと、水やりは少なめでいいこと、などをベテランのおじさんから教えてもらって持ち帰る。

July 6-8, 2024　ホシミスジの幼虫

玄関近くのオリーブを植えている鉢に、いつのまにかユキヤナギが生えていて、その小さな枝部分にホシミスジの幼虫 2 個体を確認。その姿はどこからも丸見え状態で、撮影記録をとったあと静観していたら、7/7 に 1 頭だけとなり、7/8 には 2 頭とも姿が見えなくなっている。アシナガバチに捕食されてしまったのか、蛹化場所を探してどこかへと移動したのか。蛹化であれば、オリーブの枝葉とかが考えられるが、見つけることができていない。やはり蜂の仲間に攻撃された可能性が高く、前に幼虫がついた枝葉が繁るシモツケへと移しておけばよかったと後悔。

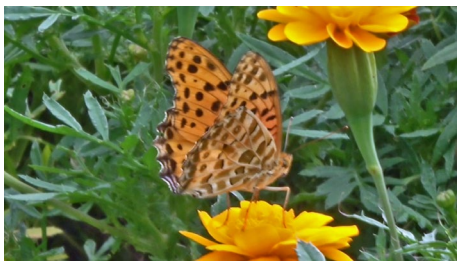
July 8, 2024　ジャコウアゲハ生息地で草刈り

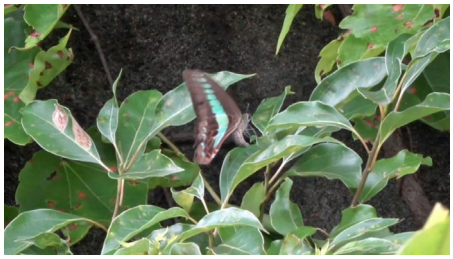
　国土交通省の除草はまだだが、ロープを張ってくれた部分に目立つ背の高いノラニンジンとセイバンモロコシを剪定ばさみで切り取る作業を約 20 分。この過程でトクサの茎への前蛹と、切り取ったノラニンジンの茎への帯蛹がみつかる。前蛹は地上から 30cm ほどの位置で、だれが見てもすぐにわかる状態。国土交通省の除草はまだだが、ロープを張ってくれた部分に目立つ背の高いノラニンジンとセイバンモロコシを剪定ばさみで切り取る作業を約 20 分。この過程でトクサの茎への前蛹と、切り取ったノラニンジンの茎への帯蛹がみつかる。前蛹は地上から 30cm

ほどの位置で、だれが見てもすぐにわかる状態。背高い草の切り取り作業の Before/After の撮影記録をとったあと土手下平坦部でまだ残る幼虫を探すと、なんと 31 頭がみつかる。7/4 に 42 頭も回収したというのにさらにまだこれほどの幼虫が残っているのが不思議。

July 13, 2024　テニスの合間に蝶観察、その後でジャコウアゲハ生息地へ

　花畑に咲くキバナコスモスでツマグロヒョウモンのきれいな♂、ランタナではアゲハチョウ、ポーチュラカではヤマトシジミが吸蜜。モンシロチョウは休息中で、木陰のクスノキにはアオスジ





アゲハが産卵。ムラサキツユクサの花周りにはオレンジ色がきれいなアオモンイトトンボもみる。

　ジャコウアゲハの生息地に着いたのが 12 時過ぎで、ちょうど新幹線のキティー号が鉄橋を渡って走る時刻前。せっかくだからそのビデオ撮影をしてから調査を開始。平坦部のウマノスズクサを見て回ると中令－終令幼虫が 30 個体ほどみつかり、すべてを路肩部に移す。7/8 にみた前蛹は無事に蛹化している。全体的にウマノスズクサが減っていて食草

としての不足が懸念されるが、そのような状況で翅が傷んだ母蝶の姿をみる。帰り際には路肩部分を飛んでおり、新たに産卵すれば食草不足はまぬかれない。

July 18, 2024　路肩部分の除草が終了

　ジャコウアゲハ生息地の県道沿い路肩部分の兵庫県による除草作業が終わっている。すぐそばの茂み部分で蛹を探すと合計で 26 個体が見つかるが、写真記録を撮るだけで回収はせずに現地で

の自然羽化に任せる。この作業中に、すでに羽化した個体がとびでてきてセイバンモロコシの茎部分にぶら下がるようにとまる。

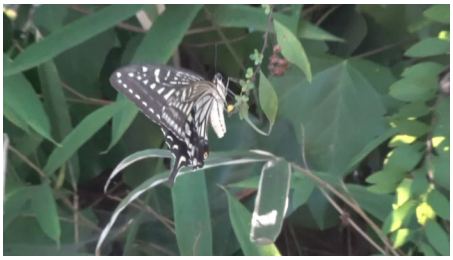
July 21, 2024　テニスの合間に自然観察

　暑さに強いツマグロヒョウモンをみて戻ると、まばらに生えるアブラナ科の野生植物に産卵して回るモンシロチョウが見られ、蛇口を少し緩めてやった水道に、スズメがやってくる。流れ落

ちる側面でも水を飲む様子がかわいい。

Aug. 2, 2024　ホシミスジを観察

　ジャコウアゲハ生息地で観察できるのは、アゲハチョウ、ヤマトシジミ、そしてユキヤナギの



周りで飛び遊ぶホシミスジ。除草が終わった路肩部分に新生しているウマノスズクサには産卵も見られるがそれは 1 か所のみとあまりに少ない。路肩から斜面にかけてよくしらべて見つかる幼虫もあまりに少なく、今年の第三化の発生から来年への越冬蛹に期待がかけられない。

Aug. 8, 2024　サルスベリにクマバチ

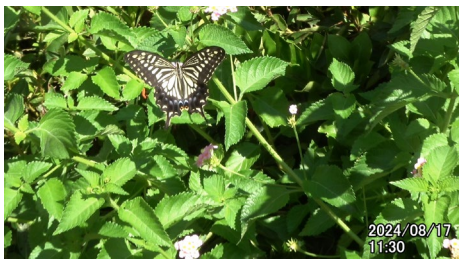
蝶による訪花がみられない代表種であるサルスベリにクマバチがやってきている光景を観察記録。蜂が花粉をもとめるのであれば蝶の訪花も期待できるわけで、注意して観察する。

Aug. 12, 2024　モンシロチョウが産卵

朝の裏庭でモンシロチョウがオレガノケントビューティーで吸蜜後アリッサムに産卵。オミナエシ（女郎花）にセセリチョウもいたが種名が判別できないまま飛び去られる。

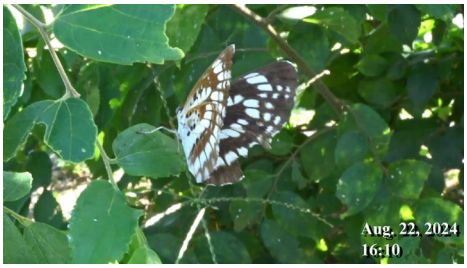
Aug. 17, 2024　キョウチクトウにアシナガバチ

古い観察記録として 2018 年 10 月 21 日にキョウチクトウの花を訪れたクロアゲハを目撃しているが、高い位置であったため花芯へと口吻を伸ばしていたかどうかも含めて撮影記録はなく、この花を吸蜜源とする蝶がいるのかどうか確かな記録はない。本日、この花はずいぶんいい香りがすることを確かめていたら、アシナガバチが訪花して明らかに花粉を摂取する様子が観察記録できた。先日のサルスベリへのクマバチの訪花と同じく、蜂が訪花するのであれば蝶の訪花もじゅうぶん期待できるわけで、今後とも注意したい。なお、この日のポーチュラカを主とする公園の花壇ではイチモンジセセリが多く飛び交い、ランタナにはアゲハチョウが花蜜を求めていた。



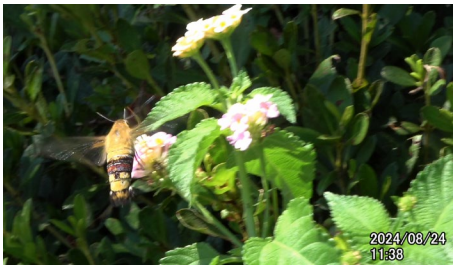
Aug. 22, 2024　猛暑の日中にみるチョウ

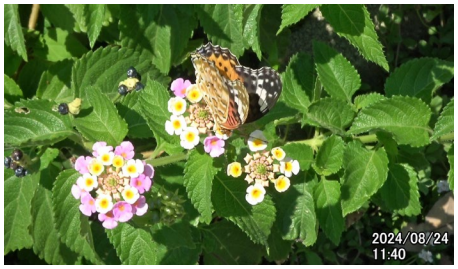
うだるような猛暑が続くが、やはり暑さに強いチョウの筆頭はツマグロヒョウモン。除草が終わってセイバンモロコシなどが復活し、ウマノスズクサもどんどんと申請してきているのにジャコウアゲハの第三化発生が危惧される土手周りで、いくらか翅を傷めたツマグロヒョウモンが寂しく 1 頭だけでテリ張りをしている。公園内の木陰となった部分ではホシミスジが遊んでおり、いきなり飛び出した後を追うと、50m ほど離れた位置のエノキの葉陰で休息し始める。



Aug. 24, 2024　テニスのあとでチョウタイム

　テニスのあとで自然観察タイム：キバナコスモスやランタナの花に集う蝶とオオスカシバを観察。ツマグロヒョウモンの♀は美しい新鮮個体で、前翅裏面の赤桃色は♂にもみられる好きな色





だ。セセリはイチモンジセセリだけでよくみるチャバネセセリはこの日みられず。

Sep. 2, 2024　加古川のシルビアシジミ Ser. 10

　猛暑続きの昼前、JA 神吉で野菜類を調達したついでにシルビアシジミの状況をみに行く。高温続きのせいで土手上草地に点在するミヤコグサに元気がなく数も少ない。いつもみるモンキチョウやツマグロヒョウモンも飛ばず、シルビアシジミもまったくみられない。500m ほど離れた生息

地へと移動し、ミヤコグサの小さな群落のある場所で目を凝らしていると、ようやく青い鱗粉をみせながらシルビアシジミの♂が飛び出して探雌飛翔を繰り返すが、やがて草葉上にとまる。♀もいたが撮影機会はなし。除草が終わった部分にチガヤが新生してきており珍しい斑入りの株も見られる。あたりのチガヤに産卵して回っていたチャバネセセリがノアザミで吸蜜し始める様子を記録して撤収。

Sep. 7, 2024　ギフチョウ生息地の環境整備：第 1 回

　「加古川の里山・ギフチョウ・ネット」の年間行事の環境整備第 1 回は、メンバー7 名に加古川市環境政策課から 2 名の応援を得て、榎谷地区 3 カ所を集中的に実施。例年実施している数か所が地元住民の理解が得られずに立ち入れなかったのが気がかり。剪定ばさみでヒメカンアオイ

の繁茂をさまたげる笹竹やイヌツゲの幼木を刈り取り、エンジン草刈り機を使った効率よい草刈りも並行して作業を進める。草刈りが進むにつれてヒメカンアオイが顔を出すが、食痕のないきれな葉が多いことは、ギフチョウの幼虫が少なかったことをしめすわけで、喜べない。雑木林内を暗くするイヌツゲやヒサカキなどの不要樹木はノコギリで切り倒す。ギ

フチョウの吸蜜源となるコバノミツバツツジを間違って切らないような注意が必要。大汗をかいた後、集合写真をとって作業を終える。

Sep. 15, 2024　加古川のシルビアシジミ Ser. 11

　この日もJA神吉を訪れたついでに立ち寄ってみる。土手斜面をゆっくりと登って平らな部分に出ると、すぐにシルビアシジミの♂が飛び出てきて、目の前のブタナで吸蜜し始めるまたとない撮影チャンス。この時期の土手周辺で蜜源はブタナだけというのがこの絶好の機会を与えてくれ

た。ずっと離れた山際にはヨメナが群生して花も咲いているが、ここを訪れるチョウはいない。土手斜面のノアザミで夢中になって蜜を求めるモンキチョウの黄色が遠くからもよく見え、ゆっくり近づいて撮影記録をとる。カタバミが群生する場所にはヤマトシジミが複数みられ、シルビアシジミとの混生地となっているが、両者が絡み合うことはない。ミヤコグサの花蜜を求めるシルビアシジミの♂がみられ、低い位置のミヤコグサに産卵して回っている♀も観察できるが、飛翔を追っていると産卵された葉の位置がわからなくなる。

Sep. 23, 2024　加古川のシルビアシジミ Ser. 12

　少し暑さがやわらいだ加古川市近郊でシルビアシジミの調査。観察できた2♂2♀中、最初に見た♂はツリガネニンジンの花へと飛ぶが口吻を伸ばす状況までは確認できず。翅の破損度が大きい

ビークマークのある♀がミヤコグサを転飛しながら産卵して回り、新鮮な♀による産卵もみる。青い鱗粉を輝かせながら飛ぶ♂は産卵行動中の♀に絡んでいくが相手にはしてもらえず、草葉上で休息するしかない。ビークマークは野鳥に翅を食い破られた状況の呼称だが、シルビアシジミのような超小型の蝶を野鳥が襲う可能性は低いと思われ、この日も目にしたカナヘビのような口が小さい小動物に襲われた結果だと推定する。実は、この場所でツチガエルが飛翔中のシルビアシジミを一口でパクリと飲み込んでしまった場面を目撃していて、カエル類に襲われたなら翅が食いちぎられるような襲われ方はないと考えられる。シルビアシジミの健在ぶりを確認できて引き上げる際、先ほど産卵して回っていた翅を大きく損傷した♀が草陰で休息しているのが目に入り、その様子を記録した直後、妻が待ってくれている車のドアハンドルへと飛び移ってまるで名残を惜しんでくれるかのように翅の開閉を繰り返す。

Oct. 2, 2024　加古川のシルビアシジミ Ser. 13

シルビアシジミの発生状況調査：4－5 頭の♂が探雌飛翔で飛びまわり、観察できた♀1 頭はミヤコグサに産卵しては休憩。♂の飛翔を追っている途中で交尾ペアに遭遇。♂がちょっかいを入れたりするが動じることはなく、ちょっかいを入れた♂はすぐに諦めて飛び去る。

Oct. 6, 2024　ツマグロキチョウを観察

テニスの帰り、ヌスビトハギの花が咲く草むらを飛ぶキチョウが目に入り、その動きを追っていると、キタキチョウにしては黄色の色調が濃く見える。ヌスビトハギの花がたくさん咲いているのに止まることなく、やがて 10m ほど離れた位置に咲くユリオプスデイジーの黄色い花で吸蜜し始める。急ぎ近づいて黒鱗粉がよく見える逆光側からビデオ撮影をすると、なんと紛れもないツマグロキチョウだ。秋になると相当の遠距離を飛んで移動することがわかっているが、この個体がどこからやってきたのかはわからない。この花での撮影を終えるとさらに飛んで小さなヒナギキョウの花でも蜜を求める。透けた前翅に影となって見えるはずの性標が確認できないことから♀だと思われるが、近隣に食草のカワラケツメイはないため産卵は期待できない。

Oct. 7, 2024　小雨の中で蝶観察

花の寺円照寺の彼岸花の鑑賞に出かけた際、飛翔をみたのはミモザの新芽に産卵行動を繰り返すキタキチョウとツマグロヒョウモンの♂。そのキタキチョウの撮影チャンスを狙う筆者に、上にもチョウがいると妻がいうので確認するとツマグロヒョウモンの♂が翅を閉じてじっとしている。円照寺にはニョイスミレの群落があって 9/22 に多数頭の終令幼虫を見ており、ちょうど今頃孵化個体が飛んでいるはずで納得できる状況。この日にはそのニョイスミレがほとんど茎だけ残るまでに葉が食い尽くされていて、まだ数頭の幼虫も茎だけでしのいでいる気配をみる。大きな酔芙蓉の花芯に口吻を伸ばすのはチャバネセセリ。寺から外に出て彼岸花が彩りを添える稲田のある部分を散策すると、コスモスと彼岸花のコラボ風景も見られ、彼岸花の撮影をしていた妻が奥の方にチョウがいると教えてくれたのは、エノコログサの花穂状にとまって雨露をしのいでいるウラナミシジミ。その近くではヤマトシジミがしおれたヨメナの花で蜜を求める光景も目にする。帰り際にアゲハチョウも現れるが彼岸花を訪れることはなし。

Oct. 9, 2024　三木山森林公園に遠征

　ツマグロキチョウの発生状況調査を目的として訪問（片道 22.5km）。カワラケツメイの群落がある場所であきらかに黄色色調がキタキチョウとは異なるツマグロキチョウが飛んでいる。太陽が雲に隠れるとすぐに草間の暗い部分へと飛んで草葉上に止まる。確認できたのは 3 個体で、い

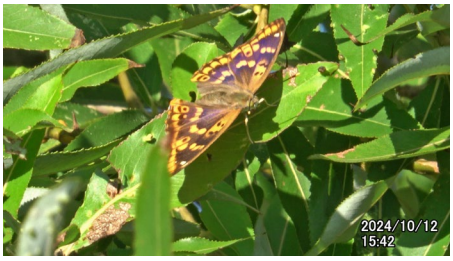
ずれも長く飛ぶことはなく、草陰へと飛んで休息態勢をとる。カワラケツメイは大半が種となっていて、黄色い花は少なく、花蜜を求める場面は見ない。また、産卵をしそうな動きが見られた個体も、結局は草陰へと移って休んでしまう。

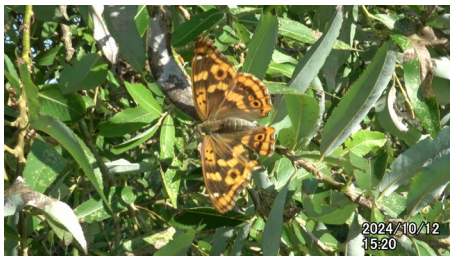
Oct. 10, 2024　高砂市のシルビアシジミ Ser. 14

　阿弥陀地区、曽根地区の 2 か所で発生状況調査。いずれの生息地も定期的な除草が実施されて相当の日数が経っているせいか、他の繁殖力が強い植物に占有されてミヤコグサが極端に少なく、シルビアシジミが活発に飛ぶ様相ではない。阿弥陀地区では探雌飛翔を繰り返す♂を 3 個体ほど、ミヤコグサに産卵をする♀を 2 個体観察できただけ。曽根地区も状況は同じでミヤコグサは他の植物の勢いに負けて路面近くに点々とみられる程度で、草むらをくまなく歩いて風をよけて草葉上で休息している 1♂を何とか確認。撮影目的で接近する気配に飛ばれることもあるがすぐに別の草葉上で休息する。ツバメシジミのように野鳥に対してこちらが頭だとだますアンテナに似せる尾状突起はないのに、後翅を交互に上下に動かす動作を見せる目的は何だろうか。

Oct. 12, 2024　加古川河川敷で珍しい新知見

　カワヤナギの樹のまわりでコムラサキの♂同志の追飛翔を観察。一二度の追飛翔を繰り返すとすぐに日当たりのいい葉上にとまってテリ張り態勢に戻るが、その位置はだいたい決まっている。意外だったのは葉っぱに止まったままでじっとして動かない♀がいて時折開翅してその存在をアピ





ールしているようにも見えるが、追飛翔中の♂が絡む様子が見られない。2 個体いる♂の一方は右後翅が大きく破損している。カワヤナギをよく観察すると、高い位置の葉陰にもときどき開翅する別個体がいて、その動きは低い位置の♀と同じことからたぶん♀だと思われる。ルリシジミやイチモンジセセリもカワヤナギの葉上で休んだり飛びまわったりしていて、コムラサキとの追飛翔にこれら他の蝶が巻き込まれることもある。飛び回っていたルリシジミがカワヤナギの葉上で休み始めるのを確認して撮影記録もとっておく。

そのうちコムラサキの飛翔位置よりはずいぶん低いところを飛ぶタテハが現れてコムラサキとの絡みも見るが、止まったところに近づくと、10 月半ばでは珍しい夏型のキタテハだ。カナムグラが群生するこの場所に産卵目的でやってきた♀だと思われるが、産卵行動はみられない。

コムラサキのじっとしていた♀が何らかのはずみで飛び出すと、すかさず♂が絡む。交尾を求めて絡みの飛翔が始まり、枝葉が重なる位置で求愛行動を見せるが♀が受け入れる様子はない。続いて別の絡み 2 個体が、やはりカワヤナギの葉の茂みへと潜り込むのでビデオカメラをズームアップして確認すると、何と先ほどのキタテハにいつの間に現れたのかヒメアカタテハが誤求愛を迫っていることがわかる。あきらかに尾端をキタテハへとまげて迫る様子がみられるが、このアピールが受け入れられるはずはない。

Oct. 17, 2024　加古川市のシルビアシジミ新生息地を確認 Ser. 15

いつもの観察地：西神吉の土手周りはミヤコグサが多い場所で探雌飛翔を繰り返して少しも止まろうとしない♂が 3-4 個体。ミヤコグサの茂みに潜り込んで産卵をする気配を見せる♀は狭い範囲で動き、ツバメシジミの♀も同じミヤコグサに産卵して回っているがその違いはすぐにわかる。探雌飛翔をする♂のなかにはミヤコグサの群落から離れて飛ぶ個体もいて、その飛翔を追っていく

と途中に咲く小さなキツネノマゴの花に立ち寄って吸蜜し始める。この花での吸蜜シーンは遠い位置からの記録しかできていなく、この絶好の機会を逃さないようにビデオ撮影に集中する。残念なのは液晶ファインダーに貼り付けた保護フィルムが陽光の反射を軽減できるタイプでないことで、フォーカス合わせがままならない。小 1 時間のねばりで探雌飛翔を繰り返す♂が疲れて静止する場面には出会えないまま見切りをつけて帰ろうとしたところで、道路際のアレチハナガサの花に固執する個体が目に入る。ヤマトシジミかもしれないと近づくとシルビアシジミに間違いない。風が強く吹いて揺れ続ける状況だが、この花での吸蜜は初記録となるため少しでもフォーカスが合った記録が取れていることを期待して、粘り強く撮影。満足のゆくフォーカスが合った場面はほとんどないが「きべりはむし」への第 7 報投稿を改訂するための画像を何とか抽出。

この日は、以前から気になっていた自動車道路を隔てた北側奥のため池周りを調べる予定で、池周りの土手を歩くと、一面クローバーに覆われてミヤコグサはわずかに自生している状況。あいかわらず風が吹く抜けるなか、小さなシジミチョウが飛び交っているがヤマトシジミなのかシルビアシジ

ミなのかの判別が難しい。シルビシジミの♀のような個体に注意して動きを追うとやがてミヤコグサのある草地に静止する。間違いなくシルビアシジミだ。ズームアップをするまでに飛ばれた♂も、小さな姿だがフォーカスの合った記録ができており、加古川市における本種の新生息地を確認できたことになる。

なお、この場所から先ほどまでいた方向をみると、ため池の水が引いて浅瀬となった部分にコウノトリが 6 頭も飛来している。その撮影記録を撮っていると、青空から新たに 7 頭目の個体が雄大な滑翔をみせながら舞い降りてくる。ここでもビデオカメラのファインダーが映り込みのためにコウノトリの飛び降りてくる状況をとらえられなくて、ズームアップのきかない遠景風景としてしか記録できなかったのが悔しい。

Nov. 4, 2024

11 月の小春日和に加古川河川敷で出会えた蝶 11 種中 10 種を記録。モンキチョウだけは撮影機会なし

Nov. 8, 2024　加古川近郊のシルビアシジミ

外気温 20℃の加古川市郊外の草原で、まだ元気に飛び交うシルビアシジミを確認。コセンダン

グサで吸蜜する♂の側面記録は風に揺れ続けてフォーカスが合わず、真後ろからの接写で何とかまともな記録となったが、新鮮度はかなり低くなっている。

Nov. 10, 2024　高知市五台山公園で蝶タイム

11/9 に S34 年卒青柳中学同窓会に参加した翌日、計画していた久しぶりの五台山に登る。ホテル貸出しの自転車で先に実家の兄を訪問し、兼山神社の近くに自転車をとめ重くなる同窓会資料類を残して独鈷水への小道をたどる。キイチゴの赤い実にカメラを向ける以外に何もなく鹿の段へと続く石段を上る。5 月にはアサギマダラもみられムラサキシジミやムラサキツバメが飛ぶ場所だが全くその気配がない。ツマグロキチョウをよく見た途中の広い草地一帯は除草後で何もいない。ようやく到着した鹿の段は、サツマシジミが発生していたサンゴジュ垣根を含む事務所の建物がすっかり消えて駐車場へと変貌している。ミカドアゲハの発生樹：オガタマノキは健在で、並んで生えるカラスザンショウも種となる赤い実が豊かにみのっているがミヤマカラスアゲハが発生を継続しているかどうかはわからない。

駐車場そばの草地にきれいなヤマトシジミが日向ぼっこをしている様子をビデオ撮影したのが本日の最初の記録。急な登りで山頂部へと向かう。食堂も併設していた展望所がすっかり平地と

なり、5月にはいい香りを放つ白い花がいっぱい咲いてミカドアゲハ、アオスジアゲハ、ヒメアカタテハ、ツマグロヒョウモン、イシガケチョウなどが集っていたマルバチシャノキも伐採され、新たに階段付きの小さな展望台が作られた風景はあまりに淋しい。

足元にはヤマトシジミが多く飛び、新鮮度が低いウラナミシジミも混じった追飛翔が見られる。ツワブキの黄色い花にはイチモンジセセリが蜜を求め、チャバネセセリはいない。ヤマトシジミが多い場所に戻ってしばらく様子を見ているうちに、新鮮度が高いウラナミシジミと思える蝶が日向ぼっこを始めるので近づくと、なんとクロマダラソテツシジミだ。山頂部には大きなソテツが１株あって、よく見ると固くなった葉にかなりの食痕が見られる。おそらく相当数の個体が発生したと思える状況だが今は撮影した個体しかいない。せっかくだから展望台に上って高知市内の俯瞰眺望を記録し、元首相の浜口雄幸像も撮影記録。南国土佐を後にしてという記念歌碑がある場所で自撮り記録もとる。ここにも食痕が目立つソテツがあるがまわりに蝶はいない。

NHKの電波塔が修復工事中で、その入口にサザンカの樹があっていくつか咲く白い花にオオスズメバチが何度もやってくる。ちょうど朝日が届く状況で目につく蝶は複数のイチモンジセセリだがやがてムラサキシジミもやってきて開翅姿勢もとり、そのムラサキ色から♀だとわかる。今回期待したムラサキツバメも来てくれるが開翅はしてくれないので雌雄が判別できない。足元を飛び交うヤマトシジミが絡むような動きに注意するとそこには交尾ペアがみられる。いきなり飛び出てきたテングチョウは高い位置でサザンカの花蜜を楽しむ。銀白色を輝かせて登場したウラギンシジミは花には目もくれずに♀だとわかる開翅姿勢で日向ぼっこをする。ムラサキシジミは同じ個体かどうかわからないがサザンカの花蜜に口吻を伸ばす珍しい光景もみる。何度か開翅姿勢をとってくれるがその位置が高く葉の隙間からビデオ撮影するのがやっとという感じ。オオスズメバチが花粉をかじるような動作を見せる様子も記録しておく。

草の多い部分に咲くコセンダングサにきた個体を確認すると新鮮度が低いクロマダラソテツシジミの♂で、その様子を撮影している最中に背後から女性の声で「牧野植物園への行き方を教えて」。その道順を説明すると同伴のご主人が迷うような場所はないかとも聞いてくるが大切なこと。道順を知って石畳の道を降り始めたご婦人が再び戻ってきて「ここには熊はいないでしょうね。私たちは北海道からきているので」と確認を求めてくる。鹿もいませんよと伝えると安心して下って行かれる。筆者も牧野植物園へと場所を移すべく車道を歩いて下ると、ムラサキツバメが路面近くを飛びぬけていく。飛翔時に垣間見る暗紫色から♂だとわかるが、やがて姿を見失う。路傍のツワブキの花にキタキチョウがまとわりつくが吸蜜することなく飛び去って行く。坂道を降り立つと東南アジア系の女性二人連れと出会い、どこからかと聞くとマレーシアからだと。緑のネットをみて「Butterfly?」と聞いてくるので「Yes, I catch a butterfly to confirm the species and then release it.」「Yah, catch and release.」次いで「Makino botanical garden.」というの

で「Straight please.」と一緒に歩く。文殊堂まで来ると、先ほどの北海道からのご夫婦が寄り道をしている。

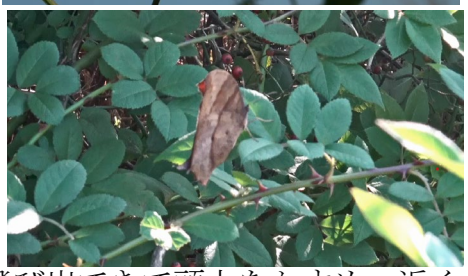
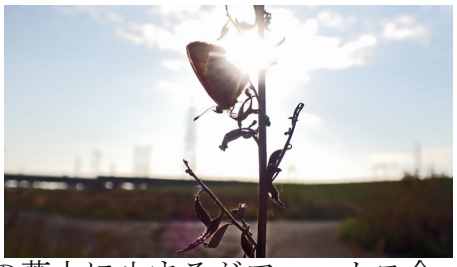
竹林寺山門の仁王門をくぐって中学同窓の竹崎土産店に立ち寄り、でてきた男性に尋ねると友人は 8 か月前に他界したという。出てきてくれた奥さんからも 1 年以上体調がすぐれない状態だったなどと話を聞き、ここで買った孫の手を今でも愛用していて、あれほどすぐれた品はどこでも売っていないなどと話してわかれる。

牧野植物園内では少年時期の像がある高台広場で、その像周りに植栽されたソナレノギクの花で蜜を楽しむキタテハとテングチョウを観察記録。その他にみるのはヤマトシジミくらいで、コムラサキのきれいな実を見過ごして歩こうとする若いお嬢さんたちに余計なおせっかいをして、戻って撮影記録を撮る価値ありと納得させたりする。園内にある咲き終わりのヨツバヒヨドリにアサギマダラの訪れはなく、種をいくらかもらってビニール袋に収めて植物園をでる。

路傍での出会いを期待したムラサキツバメはみられず、再び訪れた山頂部のサザンカにはオオスズメバチだけが目立つ状況で、もはや蝶タイムは終わりだと鹿の段経由で山を下りる。

帰りの高速バスの時間まで余裕があり、実家へと再度の立ち寄りで昼寝中だった茂兄さんを起こし、茂美君も出てきてくれて、庭に咲くフジバカマにアサギマダラがやってきてくれたなどと少しだけの談笑で別れる。途中、中学 1 年時の担任でその後従兄と結婚されたことで親類ともった杉山須美先生宅を探し当てて数十年ぶりの再会を果たし、しばらく談笑する。

ホテルに自転車を返し、市電（市内一律 230 円）ではりまや橋まで。土産店で栗味の土佐日記を買い込んで定刻 15:45 発の JR 西日本高速バスで高速舞子まで。予定より 20 分以上早い到着で高砂には 19：45 着。

Nov. 14, 2024　加古川河川敷で蝶タイム

温かい昼過ぎの河川敷で蝶観察：期待通りキタテハが登場してシロノセンダングサやコセンダングサで吸蜜する様子の撮影を楽しむ。太陽光に細毛が輝いて見える瞬間の記録もとり、低い位置から青空を背景とする場面の撮影にも挑戦してみる。ウラナミシジミ、モンシロチョウの吸蜜シーン、キタキチョウが休憩し始める様子の記録もでき、そろそろ引き上げようかというタイミングでクロコノマチョウが飛び出てきて頭上をかすめ、近くの葉上に止まるがフォーカス合わせが間に合わないまま飛び去ってしまう。最後はこれから眠りに入ろうかとするウラナミシジミを逆光で撮影。